青鞜

四月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

六月號目次

憂欝の一日（小說）　（一）　山田邦子
Y様へ（手紙）　（一五）　山田わか
東鄉ペン（感想）　（三一）　岡田八千代
松原より（短歌）　（三〇）　山田わか

獄中の女より男に（小説）（三）原田皐月

青疊（小説）（四六）五明倭文子

燈影（短歌）（六四）三ケ島葭子

私信（手紙）（七〇）伊藤野枝

處女作（小説）（八三）さくら子

編輯室より（一〇八）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

憂鬱の一日——山田邦子

太陽のありかも思ひ出せない。一面にどんよりとしていやに生暖い日だ、自分全體のありかもぼかされたやうだ、自分はひよろ〳〵と何所へ歩き出さうとするのだらう……さうだ今日はあの歌集の校正に○○社へ行くんだつた。行きたくはないけれど家に居たつてかうしてうつ〳〵と何も手に付ずにすんでしまふんだから一層出かけやう。で私は着物を着代へて外に出た。

幸すいてゐた電車に乗りこんで腰をかける、窓の外に見える野の緑は昨日よりも一段と濃くなつたやうで、櫻の葉などは吃驚する程夏らしくなつてゐる。處々に吹き流しがあがつてゐるのが見事に目につく……と急に悲しいやうな淋しいやうな心持がおそつて來た。二三日前からやつて來さうでならなかつた大しけがやつて來たやうだ、自分のやうに面白くない事ばかり重なつてゐる時もさうはないだらうから、此大しけはどんな處まで廣がつてゆくだろうと恐ろしいやうにも思はれるのであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

世の中の誰れも彼れも自分には淡冷きはまる人達ばかりだ、家、家族、そんなものもほんとうの自分の安息の住み家ではない！ こんな事さへ思はれる、然しこんな日も長く續きはしない、非常に神聖な聖徒のやうな一日がまれに加はる事のあるやうに、時に自分にはこんな一日が加はつて來る、それは丸きり發作である、自分の力で直ぐにどうする事も出來ないものであるのだ、聖徒のやうな長續きしないと同様にかういふ日も決して長くは續かない、間もなく私の心は平常に復して勉强もしようし聖書も讀もうし、家の事も思ふし家族をも暖く考へるだらう、又自分の足りないのに悔ゐを感じ責めを感じ、どうか眞實のものがよく育てられ、磨がかれてゆきたいものだと、蠟燭の灯のじつと靜まつて燃えるやうな、焔心の——中心の願望は靜かに燃えるであらう。

思へば私の內部の中心生命は、ほんとにあの蠟燭のはだか灯を持つて歩く其灯のやうなものだ、立ち止まつてじつと眺め入る時、驚く程な靜かさと聖淨さに充ちてじやと燃えてゐるのが分る、然しそれに安心して又歩き出すと灯は如何にも心細くあたりの空氣の微動によつて、もう消えたかと絕望する程其灯は痛められてしまふのである。蠟燭の灯を持つて歩む女——自分はよく自分一人でこんな事を思つた。さうして自分のおど〳〵した落ち付かない心持が出　葉のなかに含まれてゐるやうな氣がした事があつた、自分のまだ若か

つた處心の頃自分は蠟燭の灯の詩をよく作つた、無意識ではあつたが其頃からあの灯に何かなし打たれるものがあつたのだつた。

こんな事を考へこんで居るうちに電車はおひおひ混み合つて來る、自分から左ちがひの向ふに若いお嫁さんが赤ん坊をおんぶしてつり革につかまつてゐる、其前の男も其次ぎの人も立つてやらうともしない、電車のゆれるたびに若いお嫁さんも赤ん坊もなやむ。私の心のなかでは又問答が始まつた「お前何故立つてやらない」「何んだかどうしても立つのがいやだから」「お前あれを氣の毒だと思はないか」「思ふとも、見てゐるのが堪えられない程氣の毒ではある、然し今はだめ、其氣の毒な感じに刺戟されるのが心持よいやうな、もつとなやめばよいやうな氣がしてゐるもの」

それから又自分は思ひつゞける、さうだこゝにも自分が出て來る。ふと發作のやうに私には聖徒のやうな一日が現れる、其日は道を歩いてゐても向ふから來てぶつつかつた人にも「失禮」とこちらから優しい心で言ふ、電車に乘つても子供を負ふたり、荷物を持つたりした人や、又老人などが乘つて來ると、自分は何の苦もなくかるがると席を立つて「あなたこゝへおかけなさいまし」と深切に言葉をかけるのである。然しかういふ日は自分の心は決して自分に滿足してゐない。今日はどうかなのだ、これは日常の己れではない、こ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んな日が生涯つゞいたらどんなに宜いだろう、けれどもう間もなく此時間はやつて行つてしまふ、さうして又重くろしい自分にかへるのだ、かう思つては淋しくなつてしまふ、さうしてまことにそれは實現される。其翌日には荷物を持つた人や子供を負ふた女の人などを見て其なやんで居るのを見てゐると、堪えられないやうになつてじつとしては居られなくなつて席を立つのである、けれども之は決してかろ〴〵と立つのではない、なるたけなら外の人が席を開けてやるのを心待ちしてゐる心である、さうしてもし空けてやる人がない、さうして其人がなほなやんでゐるのを見てます〳〵刺されるやうになつて後ろから火を付けられた兎のやうに仕方なしに立つのである、之が私の日常である。すると彼の聖徒のやうな一日と反對に矢張りまれにやつて來る今日のやうな一日がある、彼の日が遇然にやつて來るやうに此日が遇然にやつて來るのである、かういふ日には自分は時に車掌と妙な意地のはりつこをしたり又口論なんかさへ仕てしまふ事がある、何んといふ事だろう。然し此日のやつて來るのを自分には防ぐ方法がないのである。

電車は目的地へ着した、電車を降りて石橋を渡る、折からふとあらはれた日光にほこりつぽい大道が白つちやけて目を射た、私は自分の全部が其なかにまみれたやうな氣がするのであつた。いやな一日、去れ〳〵早く去つてくれこんな日が幾日も續けば蠟燭の灯は消

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

えてしまふかもしれない、消えさうでなかなか消えない蠟燭の灯とても。（終り）

◎或るものとの問答

「彼の人の言つたやうにお前の此度の信仰もたゞ單にお前の才氣が途中から救ひあげた安住の地ではないか、よく考へてごらん」

「違ひます。それだけは違ひます、私の今の信仰はそれはまだほんの芽生えにすぎないものです、まだ之を以つて他にどれだけの果を與へたでもなければ又人の目に美として うつる花を咲かせる時にも至つては居ません。然し唯根が魂に根ざしてゐるといふ此事だけで私は今迄の自分の根ざしに比べて違ひます、と答へる事が出來るのです」

「ではお前はそれ前までの生き方は間違つてゐたものとして捨て去つたか」

「さうではありません、私の魂は一つです、天にも地にも唯一つです、捨てる事も拾う事も出來ません、たゞ與へられて來たのです。

けれども私の魂は椰子の果のやうに堅くるしい芽生のおそいものでした。闇から闇に不可思議のまゝ朽ちて行つてしまふかとさへ思ひました。こんな頑固な果實を與へられたとも氣付かなかつた私は、彼の蟹のやうに「早く芽を出せ早く芽を出せ」と焦りつゝつかまへ處のないやうな迷つた心で、種々の本を讀んだり高僧に聞いたりしてそれを土臺に之こ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

そ眞實の芽だろうとひよろ〳〵とした雜草みたやうなものを大切がつて人に示したりした事が今迄でした。然し心の底の底では只何かしら物足りなく、心淋しくありました。それを私の才氣が華々しく包み隱してしまつたにすぎません、然し才氣ばかりで自ら安んじてゐる事はいくら面を陽氣にしても私には絕えず淋しい事でした。此淋しさは今の信仰を得るまで續きました。さうして今ほんとに其淋しさから救はれてゐるのです」

「そこの處をも少しよく聞きたいものだ」

「それならたとへで申ませう、私はいつか副島といふ方の義太夫新論といふ本を讀んでずゐぶん感心させられましたが其中にかういふ事がありました、攝津大椽は生れながらの美音、大隅太夫は惡聲である。そこで大隅太夫は熱誠、魂を義太夫に打ちこんで勉勵した結果終ひに其秘訣を自得し當今綱太夫を除いて情語りとして其右に出るものもない程の技倆を持つやうになつた、大隅の熱誠自ら神を動したのであるといふ意味を說き、然るに攝津大椽に於ては生れながらの美聲で若年のうちにもう一方の花形として舞臺にのぼれた程であつた。然しながら聲の良いと言ふ事は一面に其人の藝を中途半で終らせる事が十中の九までゝある、熱苦なくして或る程度まで人を感じさせ人に揚げられる事が出來る、之が美聲を持つたものゝ徳のやうできはめて大損の所である、だからもし大椽が尋常一樣の藝人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ならば其天成の美音を弄んで我まゝ氣儘に語りまくり今日の深淵に至らずして終つたかもしれない、然し大椽其人は能く己を知り且つは藝の何物であるかをわきまへてゐたのであつた。さうして一人自ら人知れぬ苦心を重ね心血を傾けて之を研究した結果其天賦の美聲にも累せられず今日の神境に分け入る事が出來たので此攝津大椽の人格的大藝術に自分は汲みつくせぬ味を感ずるものであると言ふ意味のされる事が書かれてありました。私は自分をかくも尊い攝津大椽に並べては夢にも考へて居りません、けれどもたゞ大いなる例にあてはめて此小さい見るかげもない私の話をするとすれば私の才氣は矢張り彼の人々の美聲のやうなものでありませう、私はよほど以前から心ひそかに自分の才の爲にどんなにいやな思ひをしてゐるかしれません、どんなに才を憎んだかしれません、其くせ私を人のなかに持ち揚げさせるものは皆私の才でした、憎んでも憎んでも私は才から離れる事は出來ませんでした。けれどもそれはどのやうに心ひそかな自己の苦しみであつたか分かりません、これは眞實ではない、自己の中心の力ではないと言ふ事が目を覆ふてもはつきり分つてゐましたから私の自己は才にくらまされてそれに安住しては居られませんでした。それが又今神に感謝する大なる一つであるのです」

「よし分つた、それではお前は今までいろ〳〵讀んだものや、又聞き知つたものを全く無

益であつたと思つてゐるか」

「大違ひです。彼のヨナはイスラエルの神學者として多くの其道の書を通讀しました。然しヨナは其書物によつて眞の神に觸れては居りませんでした。――自分は平素は觸れてゐるつもりでゐたでせうが――それでエホバの言葉がヨナに向つた時ヨナは勝手に其言葉に背いてニネベに行かずしてタルシスへ逃れやうとしました、そして魚の腹に降されて始めてヨナは心からエホバに呼ばはりましたそして其時始めて眞に神に觸れたのでした、ヨナの通讀した千萬の書は直接にヨナを眞實に神につなぐ力はなかつた、然し一つの難に出逢つて魂が生死の境に置かれた時、魂が自ら目を開いた時、文學として讀んでおいたそれらの書物から得ら智識が直ちに眞の生命に觸れて驚くべき醱酵を始めてゐます、即ち讀んで知つてゐたエホバの力を眞實に受得する事が出來たのです、ヨナが萬卷の書を讀んで居なかつたらば矢つ張り其心打たれる事も漠然として居たでせうし、同時にエホバの力に戰慄く事も少なかつたでせう、されば救ひの喜びの味も亦少かつたでせう、此意味の事をいつか教會で說教に聞いた事がありましたがそれが今ほんとに私に感じられます、勿論私の讀んだものなどは僅かなものにすぎません、然しそれすらなほ、中心が目をさませばその息にふれてそれらのものにも自ら生命が傳はります、眞の意味を深くしてくれます、一つ眞に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かへれば凡べてのものに自ら生命を吹きこむ事が出來るやうな氣さへします。私の讀んだもの、又高僧等に聞いた事は一つも無益になつて居ません」

「さうか、それならそれはいゝとしてお前は何が動機でお前の今の信仰を確得したのだ、ヨナのやうな目に遇つたのか」

「ヨナのやうな具體的(?)大苦痛にはまだ逢ひません、然し私の救はれたのは、矢張り死の恐怖におそはれた其底からです」

「それはいつの事か」

「私は昔から宗教には何がなし惹き付けられる性分でした、宗教書を讀む事は大へん好きでした、從つて死といふ事が小さいうちから厭はしくも悲しくも亦不思議にも考へられてゐました、然しそれが一躍非常な力を以つて私の全身をおさへ付けたのは私が子供を生んでからです、それからといふもの何かしら尋常(たゞ)ならぬ力が私の內に湧き出しました、自分はまだどうしても死んではならぬと唯非常な力でかう思ふやうになりました。それはほんとに自分でも驚く程のはつきりした力強い慾心なんです「生きてゐたい、自分が死ねば此子は外の者の手にかゝるのだから！」とたゞこれだけ位の一通りな意味からではないのです、もつと復雜な、大した、自分にもまだよく筋立つて分り切らぬ力が自然に湧いて來

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たのです、丁度子供を生むと自然にお乳が湧き出るやうに、私は自分すら驚いてゐます。其強い慾求が、例へば金のないうちは盗人も恐くはなかつたが金が出來て急に盗人が恐ろしくなるやうに、非常な恐れを以つて死を眺めるやうになつたのです。さうしてみるとまざ〳〵と死の恐ろしさが身に喰ひ入つて來るのです、死といふものが不定に來るものだといふ事が厭で〳〵たまらなくなつて來たのです、しかも種々の矛盾が理も非もない傍若無盡を死に依つてほしいまゝにされてゐるといふ事が恐ろしくもあり恨めしくもあり死の絶對權力に對して私は餘りの事に病的になる程になつてしまつたのです、氣が狂ひさうになつてしまつたのです、「アヽもうそこへやつて來た、そらもう自分の息は絶える」……こんな事を眞劔に思つてガタ〳〵と震え出すのです、あゝ私はほんとに一年といふもの苦しめられぬきました此恐怖の爲に！　私は世の中に死程強いものはなく死程恐ろしいものはない、死は全部の王だと思ひました、私の此死に對して抱いた恐れの深さはそれは言ひ盡されない程でした。これが分つてくれなければ今の救に私が心から喜んでゐる事も分らないと思ひますし、同時に私は死を始めから恐れてゐない人の人生觀（？）にはどうも傾聽してゆかれません。少しお話が横道にそれてご免下さい。そこで此苦しさが自然にもがいて其救ひを死力を出して求め出したのです、言葉を代へて言へば此苦しみが眞實のものを生む

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

生みの苦しみになつたのです。

生れ出たものはまだか弱い、見るから二葉の小さい芽にすぎません、まだ何をする力もないのです、さうしていろ／＼不淨なものがまだ其まわりにうよ／＼としてゐます。赤兒も同様なものなのです、然したしかに眞實の魂に根ざし眞實の生命に通つてゐるものです、死よりも強い萬能の力に打たれたのです、服從したものです。一面から言へばさう言ふ時がやつて來たのです。人間にほんとの時がやつて來ると言ふ事を疑ふ事が出來ませうか、あゝ其時は私にさへもやつて來たのですもの、之を思ふたび私は安心して神にまかせます

生も死も死の後も」

「ではさうしてからお前には安らかなるばかり續いてゐるか」

「いゝえ相變らず恐れがやつて來たり、又滅茶苦茶に腹が立つて何んでも彼でも引むしつてしまひたい日がやつて來たりします。然し

「されどエホバよ汝は我をかこめる楯、わが榮え、わが首をあげ給ふものなり、われ聲をあげてエホバに呼ばはればその聖き山より答へ給ふ」

と言ふ詩篇の言葉に私は深い味を味つてゐます、こゝの微妙さはまだ思ふやうに言葉に出て來ません、たゞ「眞實」にかへる時いつもエホバは聖き山から答へて下さいます」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「死もお前にはもう樂か」

「いゝえ苦しいと思ひます、其苦しみはきつとあのお產の苦しみのやうで其場に至つて見なければほんとは分らない程の大苦痛であろうと思ひます、然したゞ其苦痛のなかにも、光つてゐる力强いものを持つ事が出來たのです、たゞそれだけです」

「一口に言へば？」

「われは主のもの、御こゝろによりて導き給へ」と苦しみに暴風のやうに吹きまくられながら唯一つのものがかう言ひませう」

「分つた。それではも一つ、これはくだらぬ問だけれど、もしこゝまで思つて來たこれも皆お前の才氣が思はせるとしたらばどうするか、お前は氣が付かずに丸で信じてゐる事が才氣であつたとかりにしたら？」

「それは仕方がありません、さうだとすればそれは神が私を才氣の女として必要あつてお造りになつたのでせう、唯私の信仰で私は救はれるのですから私としてはそれが私の魂の生命です、けれどもそこまでゆけば才氣といふ言葉は其ものにはあてはまらないと思ひます、又かりにそれに才氣といふ名を付けたとしてもそれはもう生命あるものに成つてゐます、眞實のものになつてゐます」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

した。

ステーションのあかりはあたしたちの前にさへかへつて見えはじめました。

はじめてこの小さいステーションに下りた時にたまらなくもの淋しいたよりない氣をおぼへる事をおもひました。

その晩も、やつぱりあかりばかりはれやかで人一人ゐないやうにさみしく靜かでした。

そういへば、街道にまばらについてゐたあかりの色はほんとうにさえざえして見えました。それは東京の赤い電車の通つたあとで見るあかりの色とにてゐるといふ事を繁次は云ひました。

活動の小屋はそこでの藝者屋町とよぶところのまん中にあるのでございました。養生館といふ土地でもなうての料理屋のとなりなのでした。――養生館、――ほんとうにこの土地にふさわしい名だと、こゝの家のがす燈を見るたんびに思ふのでございました。――

せまい火影の中を一ぱいにはしやいできこえるおざつきの三味線、それからふとい地唄の聲――そういふものが、あたりのしつそりした空氣の中に、とくべつににぎやかに流れてゐる露路をぬけて小屋の前に出たのでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

小屋の中にはさわがしいゝにごつた聲や物音がうずをまいてをりました。ちつともちつとしてゐない、さうざうしい見物の頭の上には、じつと一すじの青い光線をひいて、正面にうつてゐる映書はかうしたものゝ智識のうすいあたしをおどろかせるものでございました。

南極とかの不思議な形ちの鳥、そうしてその鳥の群の中にまざつてうつてゐる人達は日本人だといふ事を知つた時、ほんとうにおどろいたのでございました。――あたしは南極を探檢した日本人のある事をまるで忘れてゐたといふよりはしらない方にちかゝつたのでございました。

ロンドンブリッチの寫眞、それからロマンチックな勇士の戀物語、そうやふものが二つ三つと重なつて行くうちに、あたし達はあきがきて了ひました。けれど龜さんは一生懸命なものでした。

あたし達のうしろをとりまいてゐた土地の藝者連も、大勢の見物人の男女にまけずをとらず笑い聲をよくたてました。

遠慮のない、思ひきつたそのおもしろさうな樣子にいつか寫眞にあきたあたし達は氣をむけて見るやうになりました。

『あの妓はどこの――』

マントをきたもういゝ年をしたお爺さんは、頰紅のおそろしく紅い、せいのひくい女の肩にしなだれかゝりながら云ひました。

『どれですい、旦那』

お爺の目は、向かふのはじにゐる、形のわりにいゝ鼻のひくい女の方をむいてゐるのでございました。

『ほれ、まじ龍さんのとなりに座つてる。――わからないかへ。』

『あゝ、あれ、ありや新丁目むさしの藝者衆でせう』

二人はぢつとその頰紅をぬつた女の顏を見てゐたのでした。そしておかしな――人間らしくないその聲をきいた時、思はずふき出しさうになつたのでございました。

『おじいさん、かいんないか』

繁次はすこしはなれてゐた龜さんに聲をかけました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『もつと見てようよ』

おぢいさんは、二人のしらない女の人と、とゝり合せにいつかすわつてゐました。

そしてその人に

『ね、も少し見て行こう』

と相談してゐました。あたし達は海岸ではかなり評判のこのおぢいさんのあるわるいくせの事を思ひ出してふつと顔を見合せました。

『何、かいろうよ、御一緒に』

その女の人は無造作に立ちあがりました。

『ぢや行こう』

とうとう皆なは立ち上つて出る事になつたのでございます。人をわけてせまい、くらい布のたれた下足のところへ出た時にはもう次の活動がうつるあいづの笛がきこえてをりました。

夜はすつかりふけてゐました。

たつた一つ、アセチリンがむらさきに、青く、白く小屋の前のみちにひかつてゐました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『その晩の、よび物の有馬の猫の繪がそこにはつてあるのをはじめて氣がついたのでございました。

そのあたらしく道連れになつたおぢいさんの知つてゐる女は、みんなの前にたつてづんづん道あんないをしたのでございました。せまい宿屋の庭のやうなところをとほつて行くと思つてゐるうちにいつかあたし達は汽車のレールの多いところに出ました。

一番さきの女の人は、柵を何なくとびこえてゆきました。

それから繁次、それからあたしといふ風に、そこをこへて行きました。レールにはごつさり貨物列車が横たはつてゐました。そのかげに入つたとき、

『おーい、おーい』

唄のやうなふしをつけて遠くでだれか呼んでゐました。

『何あにあれ』

『あ、提灯つけて入るとやかましいんですよ、』

『かまわない早く行こう』

あたし達はづん／＼歩いて行きました。

『おいー、おーい』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

といふ聲をきゝながら。

おぢいさんは足元がわるい人なのでございました。ですから一番あとになつて、もうあたし逹がレールをぬけて次の松林をこさうとする時になつてもまだ柵をぬけてゐないのでございました。

『おぢいさん、どうして』

『あいよ。――おつと、路がちがつちまつた。』

おぢいさんは柵のぬけどこがわるかつたので、よその家の鳥小屋へいつか入つてゐたのでございました。

――お話して見ればつまらない話ですけど、よくあたし逹はその時の話をいたします。丁度その日の前の日は大變な風の日だつたので、路のはたに、どくだみによくにたおいもの葉がそこら中にちらばつてをりました。

――(三月十五日)――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

懺悔の心より

生田花世

——平塚様、伊藤様、原田様に寄せて——

鶴巻町の元の大家のお爺さん夫婦がいつまでも私達の事を氣にかけて、もうその家を移轉(ひつこ)してから余程になるのに、矢張私達の樣子を見に來て、床の間に軸を掛けてくれたり、庭に咲いたばかしの梅の花を持つて來てくれたり。唐子漬を下げて來てくれたり、時にはお餅を持つて來てくれたりする。お爺さん夫婦は子供がないのでいつも夫婦二人きりで大きい二階建の家で、極く安樂に暮して、盆栽を作つたり、店子の家の子供のお守をしたり、借家の前の路に落ちて居る木や紙屑を拾つて掃除したり、散歩をしたりするのがお爺さんの日課である。

靜かな二階の十疊と三疊とこがの頃いつも開いてゐるので、私はその三疊の方で仕事をする事にして毎日通つた。

今日も仕事がすんで凡ての仕事が何一つ殘らず爲し遂げられた後で、私は今まで手も觸さなかつた火鉢の火を掻き起し白い灰のおちた跡の血紅色な塊(かたまり)を見た。私の心はくつたりと疲れてゐる。丁度湯上りの時のやうに。

この私のゐる高い二階の勾欄のむかふに空が展けて、落ちようとする三月の太陽が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白くぎらぎらとしてゐる。黒い洋傘を差し並べたやうな二階家の家根がいくつも重なりあつて見える。その屋根と屋根との間には萩蒂を逆さにしたやうな木が幾株も並んで、その一番高い木の梢に、雀が黑豆のやうにばらりと止まつてゐる。どこかで稽古のピアノが鳴る。

日が靜かに暮れてゆく……。

私はこの二階の前の三軒長屋の眞中の屋根の天窓の亞鉛板の黑ずんだ死の影をぢつと見てゐる。この小さな家で私たちの家庭が出來てから、丁度まる一年間となつた。ここに二人が棲みはじめたのが三月一日で、今日は翌年の三月三日である。ああ、三百六十五日昨日と今日とを合せて三百六十七日の間、私は何をしたことであらう。私は何を讀み、又何を考へたことであらう。

私は何もしなかつた。私は何も讀まなかつた。私は何も書かなかつた。本當に私は何もせずに暮した。私はただ御飯をいただくばかりであつた。

あの時私は夫を愛し、夫を生長させてゆかうといふ事を自分の心に約束した。しかし私にそれが爲し得られたであらうか。

私は餓死しても夫を愛しようと私は云つた。云ふ事は云ひ易かつた。しかし愛する事が私によく出來たであらうか。全く彼の生活を私が抱擁しおほせたであらうか。私の愛は浮薄ではなかつたか。また私の愛は

不純ではなかつたか。また私の愛は野鄙なものではなかつたか。

愛程この世にむづかしい事業はなかつた。又愛程この世にすぐれたる仕事はなかつた。愛してゐると思ふとき多くは愛が逸（いつ）してゐた。愛したい。今また新しく愛したい。愛する力は信仰であると。信仰のあるものでなくては愛することは出來なかつた。まことに深く愛し得るものは山を動かし、海を渡る力を把持し得るであらう。愛すると云ふことだけは云ひ易かつた。しかし私には何も出來なかつた。何と云ふ慚愧にたえぬ事であらう。

自分の醜くさを見出した苦しさ、自分の愚かさを見出した苦しさ。自分の弱さを見出した苦しさ。また大きい矛盾を見出した苦しさまた間違ひを眞として考へてゐた苦しさ、殊に誠實として ゐた自分の不誠實に氣のついたその苦しさ、それらの苦痛の道程に立つて、私は不遜な臆病な自分のために愧（は）ぢて震へる。

ある人が私を不誠實だと云つた。

その人が私を乞食根性を持つてゐると云つた。その人が私を人生の外廓ばかりをぐるぐる空しく廻つてゐるばかりだと云つた。その人が私がものを食ふ事ばかりしか知らないと云つた。

しかし今私にはそれが私を誣（し）ひてゐるとは少しも思はれない。その以前のその人の

私に對する非難ははしなく我を忘れるまで私を激させた。私の世界がその人の非難のために轉覆し、私が悲しい倫落の中から取り返し、復活して來た今の生活を無慘に打破られ了るもののやうに思はれた。私の眼は血走り、私の胸は轟き、脊には冷たい戰慄が走り、其の夜も其の次の夜も私は恐怖のあまり睡る事さへ出來なかつた。生れてからこちら、まだその人程に私を罵り非難してくれた人がなかつたからである。私は愚かにも我を失つた。おろおろさして、そしていろいろと自分を辨護した。私はただ自分の經驗を自分の貧しい文字で何の顧慮するところもなく、それを書いた。私は間違つた事を考へてもそれを間違つたまま告白してさうして愧を身にうける自分の性分が辛かつた。それから小心な私はまたまるで其の人の催眠術にでもかかつたやうにその人のまはりを惑亂して歩いた。私はその人を怒つた。その次には怨んだ、また怖れた。またその人を憫れんだ。然し終にはその人に逢はずには居ても立つてもゐられなかつた。それでその人に近づき、その人を得ようとし、その人を愛しようとした。さうして私の子供らしい思ひ付は相手のものの笑を買つたにすぎなかつた。

今思ふと私は自分の經驗を誤認して書いてゐた。眞と思つて私の考へた事は考へ違ひであつた。私は私自身を無意識に僞き、また他の人を、又私を非難してゐた人を無

意識に欺いてゐた自分の無智を愧ぢずにはゐられない。私のあの經驗は私が自分の筆で書いたやうなあのやうな見方をすべき經驗ではなかつた。もつと違つて見なければならぬ經驗であつた。私は今までそれを知らなかつた。そして私は最初から最後まで自分の經驗を語る外には何も持つてゐない上に、經驗の見方は私が進歩し生長するに從つて違つたものとなつて行く。

私は間違ひを云つてゐた。眞しやかに誠實げに私は考へ違へて云つてゐた。これは何と云ふ苦しい發見であらう。

で、畢竟は何であつたか。その人が私を破滅させようとする相手であつたか。その人に私の復活したばかりの生活を打破する意志があつたか。その人は私を善くし、その人は私を賢くし、更に私に悔悟させてくれる私の眞實な忠告者ではなかつたか。誰がさう戒めてくれる程私を愛してくれたらうか。誰が今まで私の傲慢をこらし、そして私の偏見をあらためさせてくれたか。愚かな私はその人を不正直だと云つた。私はその人を無智で高慢だと云つた。そして私はその人を裁いた。私は罰せられずには居らぬだらう。自分の梁を見ずして、他人の眼の上の塵を私は拂はうとした。何と云ふ不遜な愧を知らぬ私の行爲であつたらう。私は恐しい罪人ではなかつたか。

私は誠實であると自ら證した。しかし私の口が自分の誠實を證する時、誠實はもう

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私の骸から飛び放れてしまつたことを私は知つてゐたか。愚かな女は誰か。不誠實な女は誰かあなたよりは私が苦勞してゐますと誇つたものは誰か、そしてしきりにはしたない自己辨護をしたものは誰か。

天地のどこに身を匿し置かう、私は町を歩くことが出來ない。人が皆嗤笑つてゐる。すべての草、すべての木、すべての生物が私を笑つてゐる。あゝ、この無智な、不遜な、愚かな、卑劣な女を誰が齒しよう。

懺悔！　懺悔！　切めては懺悔が私を救つてくれよう。悲しい悲しい懺悔の涙を掌にのせて、さうして隣人に詫び、友人に詫び、私は生き始めよう。私は死なずに置かう。ほんの一つの誠實なりと行ふために、ほんの一つの善事なりと行ふために、ほんの一つの愛の仕事を果したい爲に。

私が苦しがると姑が苦しがる。さうすると夫が苦しがる。私が微笑すれば姑も安堵し、夫も亦安んじて仕事をするであらうのに、それだのに私は苦しくてたまらない。私は姑が怖しい。何の理由もないのに私は壓迫を感ずる。おそらくはこの脅迫觀念は私の無智なためなのであらう。「夫を愛する愛が姑を抱擁する程夫に對する愛が豐潤ならば」とある理想家は云つた。しかし私はどうしても姑と一緒にゐるのが苦痛でならない。夫に對する愛が足りないのだと人は云ふが、夫を愛することと、夫の母と同居

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

することとは別々の事件ではないか。その性格も知らずその境遇も知らず、まるで見も知らぬ、自分とは何の連絡も交渉もなかつた老婦人と突然に是非とも調和し同棲しなければ、夫を愛する女ではないと云はれなければならないか。

　私はただただ姑を怖れた。そして私を壓迫するもののやうに感じた。それで私は成可接近しないやうに、成可ぶつつからないやうに遠く遠く遁れるやうにして、そして自然に同居の中の無交渉な生活を作らうと努めた。そして私が萎縮すればする程姑は苦悶し、夫は懊惱して、一家は暗澹としてしまつた。そしてとうとう波瀾が生じ恐ろしい破滅の淵が私の心にはつきりと見えるやうにまでなつた。「破滅が見えた」この感じは私を激しく戰慄させた。その戰慄の中に、その恐怖の中に、その懊惱の中に、その破滅を感じた刹那に私の心にほんのりと水の潤ふやうにあはれみの情が生じた。あはれみの情がしとしとと溢れて、そして、夫を眺め、姑を見た。また己れ自らを見た。三人の破滅に向へるそれぞれの不憫な姿が私にはつきりとした。三人の命が姑は夫につながり夫は私につながり、私は夫につながり、三つの命がまるで一つの骸のやうにな[illegible]存在してゐると云ふ理解が私、[illegible]た。そしてはじめて破滅を感じたその痛さの力で私は姑の中に自分の生活を發見することが出來た。そしてこの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

老婦人も亦私の一部の命であるといふことを悟つた。愛しようといふ意志がその後はじめて生れて來た。

その間、私は丁度三十五六日の惱みを經た。私の母は姑、小姑を抱擁して、よい生活を形作るまで七年の苦勞をした。その後漸く母は自分を擴張することが出來た。姑を愛すること、小姑を愛すること、それをよくなし得る力は妻に與へられる夫の愛の扉を開く力であらう。さうして私にその愛の力がありよく姑を愛する時、私の生活は廣がる事が出來るであらう。然し私はまだ限なく姑を愛し得てゐる譯ではない。漸く私は姑を自分の生活の中に發見し、あはれみを感ずるまでになつただけである。彼の寂しい老婦人をもつと愛しなければならないと私は思ふ。併し又それとともにたとへ破滅の淵をのぞくまで、不和を感じても自分のどうにもさう思はれぬ事、自分のどうにも愛せられぬもの、自分のどうにも信じられぬ事を、いい加減にさう思はうとしたり、いい加減に愛しようとしたり、またさう信じようとしたりしてはいけない事を私は思ふ。

底まで降りてゆかう。底から眞を感じて來よう。それが私のしなければならぬ事ではなからうか。元より底まで行かなくても眞を知り眞に生きる人は偉い人である。けれども私はどうしても底まで沈まねば何事もわかつて來ない悲しい性分である。火を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

握つて火傷をしなければ痛さを知り、それが握れぬものであることが私には分らないのだ。

私は自分の經驗を告白するより外に才能はない。私は理論を知らず、私は批評の力がなく、其の上私は見識がなく、又頭腦の明晰な人間ではない。私はただ自分の生き方を告白するだけであらう。それで私の生活がつまらない生活ならばまた告白もつまらない告白であらう。どうか自分をよくしよう、さうして誠實な告白をしたい。

止むを得ないと云ふ事をしきりに私は自分の事件の辨護の時に使用した。その人の言葉は原則である。理想である理想はどこまでも理想であり、原則はどこまでも原則である。人間はさうはいかない。止むを得ないと云ふ事によつて恕さねばならないと私は云つた。しかしこの事は私が他人に對して云ふ言葉であつて、自分に向つて云ふべき言葉ではなかつたのではないか。自分を自分で寛假しようとする心事はあまりに卑怯な、またあまりに不幸な事ではなかつたか。眞の幸福は限なく自分を責めた後に潤ひ出す清水ではなかつたらうか。私はこの事にも自分を否認しなければならぬ。私は昨夜『ミゼラブル』のジャン●ヴァルシャンを活動寫眞で見た。そして私の懺悔に暗示をうけるところが多かつた。

私の不圖した一文から『貞操』のことを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私に教へてくれる人が多くなつた。平塚さんの『處女の價値』によつて、私はあの經驗に對する自分の見方が適當でないのであつたことを發見した。私は氏の聰明な評論を尊敬し感謝せずには居られない。今後また新しく他の見方からも一度眞を摑む努力をしようと思ふ。さうしてそれは私の『戀の課程』を語ることである。多分私はそれを『反響』の四月號に書きたいと思つてゐる。『貞操に就ての雜感』を書かれた伊藤さんから、私は伊藤さんのもつてゐられる『態度と情熱』とに動かされるところが多かつた。伊藤さんにああ云つていただいた時、私はそれを讀んでから一層深い尊敬を感じるやうになつた。さつきさんは正直な方である。正直な氏の感情と、そのはつきりした頭腦とは私の混濁と不純と不甲斐なさとが腹が立つてたまらなかつたのだらう。私はあなたに不正直だと云つた私の無禮を深くお詫びをいたします。

——(三月九日)——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

寂

菅原初

二十三の私は、
或る日、私の最も愛している丁と相對の中に、
今迄、嘗て、知らなかつた、或物にぶつかりました。
そして、その驚きから、やゝ落付いてきた私の心は、以前のように驚かなくなりました。
血で染めたような、赫い太陽が、
二人の前にまろび落ちてゆくのを眺め乍ら、
哀しい涙が胸に流れました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それからといふものは、ついぞ以前のような、鮮華な日が照つたことがありません。

私の太陽は、それ限り曇りました。

寂しいといふものを、初めて經驗したのは、二人居た時でした。

その時からして、二人一所に居るといふことが、

一人居るよりなほ、寂しいものに思へてなりません。

人間の「心」と「心」とはくつきりかち合ふことが出來ないものかしら。

長の間の疑ひに、辛捧が出來なくなつた私

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は、Tにきゝました。

私のTは、その答のあとから、こんなことを云んです。

「あなたは、からだは、丈夫でしよう」

私は益々、寂しく思ひました。

眞面目な問であつたのに、

病氣扱にされたのが、何より悲しうございました。

慢る人間に對する、神罰として、寂しみに泣くのが運命(さだめ)ならば。

けれども神話を引いたTの話は、今の、私には、あきたらないのです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

またと無く、愛しんだ、たつたひとりの、
Tにさへ、
最も、親密な、抱擁の中にさへ、なほ心の
別離を感ずる、のですもの、親しきものゝ中
にさへ別離と、會合とを始終送迎する、人間
の心のはかなさ。

若いBは遂々自殺して死にました。
しかもこれと云ふ、鮮かな原因もなくして。
Bの周圍はさまざまでした。
翌日になつて三面は云ました。
……詩の誘惑だとか——失戀だとか、さも、
若い女にありさうな、
「勝手な文句を、勝手に並べて。
それればかりじやありません。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Ｂに最も近い友人さへも、彼女を無慘な狂者にしてしまいました。

私はこの話を聞いた時、心から、寂しい思をしました。

誰がどの位、Ｂのほんとうの心に觸れたと云へませう。

誰がＢの胸をどれ丈け、透視することが出來たと云へるか。

勿論私自身にも決してＢの心が解つたといふのじやありませんが。

ただ、こんな、話をきくと情なくなります。

あて、ずつぽうな、その輕はずみよりも、

たゞ只、相觸るゝことの不可能な人間の心を悲まずには居られません。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

けれどもそれはBにとつては何でもないことでした。

遺書一つかゝないBは、自分の日記を燒いていつたBは、

之等の人達より、餘程解つていました。

Bは誰にも話さないで獨りで死んでいつたのです。

之等の人達よりずつと賢かつたのです。

こう迄、人間の心と心とは、もの云ふことが出來ないかと思ふと、口惜くて、くやしくてなりません。

はがゆいのです。

私はTの前で、ひとりではがゆがります、

が、何のために、いらつくか、Tには無論解りつこはありません。たゞ妙な、私の表情だけは、Tの眼にも映ります。

そんなときには、きつと、その人は、「どうしたのだ」と親切に尋ねて呉れます。がその度毎に、私はその説明に困じます。――どうして、どうして、そう簡單に答へられませう。

「私を抱いて下さい、私の心を抱いて下さい」高じてくると私はいつも、こう叫び、叫びました。

その人の腕に落つる熱い涙に、Tはよく驚されました。

それもお互に笑つてすごす内は、まだ、い

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゝのですが、時によると、Tの癪も起ります、神經も尖つてきます。

私は、圓い神經のTが、また、自分と同じ經路をとつて行くのじやないかと、怖しく思つたこともあります。

でも、一度はみんな通る路だ――と、自棄な心も起ります。

これと申すのも、みんな痛ましい人間の寂しみに外ありません。

寂しい心は、Tを捨てゝ、すべての人を捨てゝ、ふらふらと飛び廻ります。

恐くは永刧の、彷徨かも知れません。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

處女作（長篇）——千原代志

（一）

Yさんは東京通として容されてゐた。

彼女自身もその心算だつた。二三ヶ月以前から彼女が書記として雇はれて居る、英國傳道會社の女敎師ローリングさんは、彼女を人に紹介するのに何時も『東京からゐらした人さん』と云ふのであつた。其實Yさんが二十二歳の今日迄東京生活をしたといふ月日は、僅かに三年に充たない位のものだつた。

玆に彼女を中心として或事件が持上つたのである。

其れが僅か一週間の短時日内の出來事としては、餘りに事件が急激に發展したのと、しかも意外の方面からであつたがために、彼女等を取園んで居る宗敎的雰園氣の人々は非常に面喰つた。そして唯驚き周章た。

それはYさん自身にすら思ひもよらない事だつた。と云ふのは何もYさんは此事については普通の人生問題としか思つて居ないけれど、事件の眞相に何等の理解も持たない、寧

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ろこんな問題に與る權利のない程、無智頑瞑な人達がよつて集つて、徒に頭を惱めたり、つまらない小刀細工を試みたりして、騷ぎを大きくした事が慊らなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

Yさんは一週間の豫定でローリングさんの下をはれて、彼女の紹介で其處から汽車で約一時間ばかりの某市に、これも英國婦人で來年から公然傳道に從事すべき、セニオさんの日本語の勉强を助けるために、其家に寄寓する事となつた。

Yさんの滯在してる此家には、セニオさんの外に此家の女主人とも言ふべき、ボイドさんと謂ふ女敎師と他にNさんTさんと云ふ二人の若い傳道婦が居た。彼女等はみんな忙しい人達ばかりだつた。毎日々々各自熱心に敎會の信者等を訪問などして、何くれと其の使命の自覺の前に忠實な人々であつた。猶其他に小母さんと呼ばれる、土佐者の元氣なコックと、小松さんと謂ふボーイ役の婦人とが、二人の西洋婦人の爲に働いて居た。

Yさんがセニオさんの爲に日本語を講じるのは午前だけだつた。豫定の一週間も過ぎて明日の月曜日にはローリングさんの處に歸るといふ日曜日の午後、ボイドさんの家では例の通り日曜學校が開かれた。

Yさんは一つにはこれが五月蠅くもあり、一つにはふと斯うして逗留する事になつた最

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初から、何となく感じよく今更淡い執着をさへ感ずる此の市街に、最後の袂別をするつもりで、近郊での勝景と目されて居る武甲山と云ふへ單身で出掛けたのである。

彼女は非常に自然を愛した。無言の裡に自然と交感し對話することが、彼女にとつて什麼に樂しい事であつたらう。殊に彼女が書いて居る自由な世界などとは殆んど沒交渉な、最近の彼女の周圍には、心から語るに友もない處から、此比較的呑氣な一週間に成るべく多くの自然を吸收しやうと試みたのである。

それで彼女が此地に來た翌日から、殆んど毎日の樣に午後から手近の山を足探り歩いた。或時はセニオさんも一處だつた。

軍港地として重要な地位を占めて居る此の市街は、三面を山に圍まれて、女教師の家のある町などは殆んど急な山の斜面にあつた。市街は雜然として喧噪であつた。港も美しくはなかつた。山もさうであつた。一體に瀬戸内海の山の特色で、疎らな痩松の間から干からびてギス〳〵と骨張つた地膚を露はしてゐた。

けれどもその市街の雜然と喧囂とは、生の爭鬪に潑剌たる力を漲らした。乾燥したぎごちない自然も彼女の遊心を牽くに充分であつた。

彼女は今ボイドさんの家を出て、Tさん達から敎はつた通り、市街を横ぎつて目的の武

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

甲山に行くべく道を急いだ。

午前に教會の禮拜に出席した時の儘、藍がかつた立枠模樣の小紋紋付の羽織に、色鮮かなオリーブカシミアの袴を巧に着けて居た。彼女は何時も袴を重寶がつて用ひる。

彼女の能く發達した偉大な體格と、美しい血色の若々しさとは、斯うした彼女の服裝(いでたち)と相俟つて、物珍らしい街の人々の注意を牽いた。今一つ彼女の眼鏡の金縁である事も確かに原因の一である事を、彼女は知つてゐる。

市街を突つきると直ぐに山手の廣場に出た。其處の共同運動場では水兵の調練があり、一方の方では中學生であらう、盛にベースボールの競技中であつた。

見物も可成多かつた。何でも此の邊りは、中學校や女學校や小學校やなどが集まつてゐる處であつた。

此等を右手に見て彼女は身輕に堤の上を進む。

山陽の二月の日光は麗かに暖かつた。堤の兩側の草は春の光を享けて幸福らしく可愛らしい芽を擡げた。

運動場の人々の視線は何時しか、堤の上を歩いてるYさんに集まつた。道傍に立つて見物してた四五人の一團は彼女を見返つて何かひそ〳〵と囁いた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼女は其等には全く氣付かない風で、唯何物かに憧がれる樣にいそ〳〵と步調を輕めた。

道が大曲りになつて愈々貳甲山の緩漫な登り坂に差しかゝる口に、赤煉瓦の大煙突が立つて、○綳帶製造所の文字は白く明白に記された。

恰度其前で先程から彼女の前方を步いて居た、二人の海軍々人を追ひ越す事になつた。彼等は製造所内に立寄つたのである。

此處で一廻り山に沿ふて道が曲つてからは、四圍が全く靜寂であつた。市街の物音は勿論、運動場からの喧噪もはつたり聞え止んで、人蔭も無く唯行手に當つて谷川の瀨の音と覺しき淙々の響を傳へた。左手なる道上の木立に名も知れぬ小鳥は嬉々と囀つた。道下の畠には麥の葉が靑々と延びて、やさしく震へた。

Yさんは獨り莞焉に點頭いた。これは彼女がこんな場合よくする事だつた。彼女の五感に觸れるあらゆる物皆は、悉く懷しく慕はしかつた。人を見かけたならば直に笑ひかけたり、話しかけたりするであらう。彼女は自然と言ふ偉大なものゝ前には、人間は皆造物者の最愛の子として、何等の懸距をも危險をも感し得ないのである。

市の子であらう。三人連の穢苦しいのが田市から驅け上つて來た。Yさんは突然身を屈めて、其中の一番年下の腫れ上つた凍傷の手に唇を捺して吻はうとすると、袖口の中に引

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

込めてしまつた。それで其の張切れさうに赤く色づいた、鼻糞のへばりついた頬べたを强くチユツと接吻した。

其子はおづ〳〵しながら、無言つて手に持つてた款冬の薹を彼女に與へた。山に行かうと誘はれたが肯じなかつた。

彼女は今、恰も野に放たれた小鳥の樣に樂しい。麗らかな春の日を滿身に浴びて、裕かな胸を張りながら、好きな句を口吟んで殆んどダンスの步調で進み行く。

道は新しく造られたのであつたが、何處までも緩漫に平坦である。谿の眞中に、眞直な幹の高さの四五間もあらうと思はれる松の木がわざと唯一本其儘に殘されてあつたりなどした。

彼女は物珍らしげに片手を幹にかけて、つく〴〵と見上げた。

先程から淙々の音を送つて居た、貳甲川は眼のあたり道に沿ふて流れた。

松の翠に砂白きあたり、底の小石の見るからに水は淸く澄んで、午後の太陽は燦々とその表面に微動した。其前後では同じ水が輕い叫びをあげながら、岩に當つて白く碎けた。

彼女は曾て其少女時代を過した山間の故鄕の山河を想ひ起すのであつた。中仙道の有名な山國、潤ひに富む山々のたゞずまひを忘られなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

平坦な廣い道は漸く終つて、其處に形ばかりの竹矢來が結られた。此處からが即瀧に行く道なのである。是より内部は山も稍異なつた趣を呈した。岩石の重疊した急な山道にさしかゝるのである。

戸口に嚴つげな『開放嚴禁』の札が掲げられて、矢來の戸は思ひ切つて開放せられた。一歩踏み込むと『是より中許可なくして立入る可らず。海軍司令部。』の立札が眼に付いた。

彼女は當惑した。輕い矛盾をも感じた。が仕方がないといふ風で、何人かの來るを待つて一應尋ねて見る事にした。斯う決心するとすぐ傍の石に腰を下して、改めて周圍の景色を見廻した。

ものの五分も經たないうちに、彼女が今來し方に一個の人蔭を認めた。其人は道に沿ふて生えてゐる疎らな松の木間からちら〳〵と此方に向つて進んで來るのであつた。軈て彼の人蔭は、山に沿つた道のカーブの彼方に入つて隱れた。

彼女は暫時待ち遠しい心持で、彼がカーブの表面に現れ來るのを待つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

（二）

漸く山蔭から姿を現はした人は、同じく日曜日の午後を此あたりに杖を引くらしい、鳥打帽にインバネスの中年の紳士であつた。

此人が可成近づく迄Yさんは何くれと景色を眺める事にした。

十數歩と思はるゝ頃彼女は突と起つて、彼人の方に向つて物問ひたげに一歩進みながら會釋した時、はじめて此人が、つひ今朝の禮拜の席上で會つた教會の牧師である事を知つた。

『まあ。先生もご散歩でいらつしやいますか。』

『え、あんまりいゝお天氣ですから。此邊へはつひちよい〳〵まゐりますよ。ところで貴女は非常にお足が早いんですね。』

彼は一見超然とすまし込んでゐる人だつたが、Yさんは此一刹那の彼の態度に、何か恁う、凭つかゝられさうな、一種の輕い困惑を感ずるのであつた。それに此人は亦何だつて自分の足の早い事なんか知つてるのだらう。而しこんな疑惑は、彼女が茲に思ひがけぬ知己を得た喜悅によつて容易に打消されて仕舞つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『あらさうでございますの、えゝ隨分お轉婆なんでございますから。』と立札を指して
『皆さんは瀧のそば迄行かれるんだつて仰有いましたが、こゝには這麽に書いてございますから、什方かに伺つてからに致しませうと、實はお待申して居りましたの。』
牧師は一寸眉を蹙めて、
『さうですねえ、確か此頃は入つてもかまはない事になつてたと思ひますが……。』と要領を得ない。
又一人の人蔭が後方に見えるので、二人は今一度其人を待つて尋ねる事にした。
Yさんが始めて此牧師を知つたのは、彼女が今度此地へ來る二週間計り以前に、ローリングさんに連れられて、神戸あたりの或ミッションスクールの生徒で、實地傳道見習のため暫くの間學校からローリングさんの家に送られて居ると云ふ一つ年下の娘と一所に、ボイドさんの家に遊びに來て一日を過した時、恰度茶の時刻に此牧師も同席して、互に紹介されたのであつた。
Yさんの此人に對する最初の印象は餘り可いものではなかつた。口の惡いYさん達は後でこんな評をした。
『何だかいやにねち〳〵した人ですね、第一あの眼付がいけない。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Iも一しよになつて、
『妾、あの白いズボン下が隨分おかしかつてよ。』
實際几帳面に結ばれた白いズボン下の紐が、袴の下から覗いてるのは、全くたまらなく滑稽に見えた。
其後再びYさんだけ此地へ來る事になつてから、此週の水曜日の夜の祈禱會の席で、牧師の說敎を聽いたり、しみ〴〵其横顏を見たりした時、どこか彼女が嘗て知つて居たKといふ若い男に似た面影があると思つた。YさんとKとの關係は可成な程度迄進んだのであつたが、其後執着のない彼女の、我儘な自由行動からふつつり立消になつてしまつてゐるのだ。
Kも隨分センチメンタルな男だつたが、此人にも何處かそんな樣子が仄見えた。否Yさんの定義では、總ての男は總ての女よりも、センチメンタルなものであつた。
牧師の殊勝らしく落着いた態度、整然と秩序立つた其說敎、温和な其音聲、而して其謙しやかな容貌には、何者かある憂欝の蔭を漂した。
Yさんの心中で囁いた。『なぜ此間は此人があんなに、間が拔けて醜惡に見えたんだらう。』と。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二人は此處の景色に就て、二言三言語り合つてゐる間に、先程の人は近づいた。それは水兵であつた。

『あゝ、水兵さんなら、伺つたらすぐにわかりませう。』

が、二人の期待ははづれた。この人も亦瀧を見やうために來たのであると言つて失望さうな顏をした。

牧師は思ひ出したやうに、

『たしか登つても大丈夫なんですよ。それに私は瀧の工事を監督してゐる、土木技師の鈴木さんといふ人を知つて居ますから。』

Yさんはまだ躊躇つた。

『だつて叱られたら困るぢやございませんか。』

牧師は再び自信あるものゝ如く、

『いゝえ御必配には及びません。さ、參りませう。行つて鈴木さんに賴めば何でもありません。』

水兵はもうずん〳〵登つて行つて居た。

二人は貳甲河に渠けた石橋の、狹い端を渡らねばならなかつた。牧師に先を讓られた時、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Yさんは一度は辭退したが、氣輕に先に立つて渡つてしまつた。

牧師は傍の小石に片足を掛けて、例のズボン下の紐を結び直して居た。Yさんは見て見ぬ振りをしてゐたが、彼は、『下まで下げてると歩き難くつて仕方がありません。』と言つた。

ものゝ一丁も行かないうちに先の水兵は引返して來た。その後から、

『あなた方は何處へお出の心算ですか。』

と激しい聲が咎めた。

縞背廣に同じ半洋袴、きちんと草鞋を穿いた、痩せて小柄な、色の飽迄黒い、見るからに一個の土木監督だ。而し鈴木さんではないと見て取つたYさんは、彼女の社交術を振つた。丁寧に愛嬌よく謝し、調子よく辯解した。

土木監督――假にさう呼ぶ事にする――は餘すつぽ、そんな辯解に耳を籍さうとはしなかつたが、此方の二人の温和な態度に、最初の見幕は失せて、急に好意を持つらしく、氣の毒相に、海軍の機密に屬する事故、などゝ言つて、懇に貳甲の瀧の眞正面を見る事の出來ると云ふ燒山の登り口を案內した。

鈴木技師は今はもう、此山に居ないとの事だつた、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

（三）

男女は燒山道と書いた石標のある處で、土木監督に別れた。
今度は女はどうしても先に立たなかつた。
『貴女、何時迄にお歸りにならねばなりませんか。』
『あの六時……では暗うございますね、五時頃迄に歸ればよろしうございますの、今晩の禮拜までは何も用事がございませんから。』
道にはちらほら人蔭が見え初めたが、燒山へ登らうとする人は無かつた。
登り口の細徑で二人か摺れ違つたのは、田舍の遊び人とでも謂ふべき風の男だつた。件の男は、素足に紅緒の麻裏草履を穿き、手織らしいごつ／＼した大名縞の綿入の着流しに、對の羽織を頭から引被つて、そして此方の男女の一行を等分にじろ／＼と見るのであつた。
男は徐ろに彼が自然に對しての憧憬に就て語つた。そして、
『例へばですね、自然を仲介者として人間相互の最高尙な趣味を交感する事の出來るといふ事は、實に嬉しいではありませんか。即ち私は今、貴女が愛し憬れていらつしやる此の同じ自然を通して、あなたの內心の高尙な或者に接し得て、非常に滿足を感じて居るので

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

す。』

眞面目腐つて、如何にも眞劍らしく、這麼事を言はれて、女は何だか擽つたく感じたが、笑ひながら即同意した。

男は總べて話題を高尙に、趣味あるものに採るべく努めて居るものゝ如く、彼女に話しかけた。そして時々振り返つては、自然を嘆賞する事を怠らなかつた。女は興味深氣に熱心に耳傾けた。

先に立つ男がふと立止つた時、足下に白く帶の樣な道を見た。それは先刻彼等が步むで居た道である。三々連れ立つ人もあつた。此道と、道に沿ふた河とを距てゝ、相對する山の中腹を橫ぎる一條の道があつた。これに沿ふて引かれてあると云ふ、海軍の飮用水の貯水池も男の注意によつて解つた。それは正方形に石で疊まれて、淸げな水は滿々と湛へられた。

暫くにして山道は二つに分れた。

彼方の山の殆んど凹地の小村落の兒童等は、朝夕この道を辿つて此方の小學校に通ふて來るのであると聞いた時、女は故里などの山奥に殆んど猿と撰ばない樣な生活をして行く、人間を思ひ出した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『そんな生活をしても同じく一生涯なんでございますねえ、でもまあ兒童達が可愛さうに、此頃はさぞつらい事でございませう。』

『案外さうしたものではありません。傍から同情する程ではなくて、住めば都と云ふ通り、殊に兒童等が毎夕嬉々として家路につく有様には、實際羨しいものがありますよ。』

『ほんとにねえ。おせつかいに餘計な心配だつて言はれませう。天の配劑は甚麽人にだつて、各自、他の得られない美しい滿足と幸福とを與へられてあるんでございますもの。』

何時しか二人は瀧の見える處迄來た。少許の距離はあるが、瀧の全姿は手に取る樣に見られた。風の向によつては滔々の響も運ばれる。

瀧の水は、各自の面を持つた岩石を爬ふ樣に傳つて、眞白に、二段にも三段にもなつて落ちた。瀧坪は一旦白く渦卷き泡立つて狂ふたが、軈て青く靜かに淀んだ。

男女は暫し無言で眺視た。

ふと互に顏を見合した時、女は殆んど其れと解らぬ程に、眼で微笑んで、一段高い彼女の位置から下りて來て、男と同じ平面に相竝んで立つた。そして矢張無言で、瀧の右手を指した。

其處には形のいゝ大きな岩が屹立して、一團こんもりと、椎、樫、櫻等の老木に交つて

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜木の深い茂みがあつた。

『ね、まるで何處かから持つて來て、とつつけたやうでございます事。』

全くこの一團は丏然たる築山の感があつた。周圍の松山の薄代赭色の肌とのコントラストは、此の感を起さしめるものがあつた。

岩の眞下、森の茂みの中に、瀧の觀世音の祠がある。

『あの觀音樣のとこへ行きたい事。』

『景色の中へ入り込んだら、つまりませんよ。此處で見てるのが一番いゝ。』

と、不意にダイナマイトの爆聲が二人の談話を杜切らした。二人は思はず莞と笑み交した。

トロッコはレールの上に空しく轉んで、人夫等が土砂を運んだ、大規模な石だゝみも半ば築かれた。下の斷崕から大仰な足場の裝置らはれたのも、女には此等が何のためにどうなるものなのか解りやうもなかつた。

瀧の水が割かれて海軍に其水力を利用されると聞いた時、

『あたら自然はさうして破壞されて行くんですわ。』

女は大袈裟に嘆息した。

『さうです然です。以前此軍港の海軍經理部長は、隨分面白い自然觀乃至人生觀を有つた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人でしてねえ、其人の曰く、『人生は物質の平面化である』と、破壞しつゝ平面化して行くのが我々人生の營だつて、或はさうかも知れませんね。』

『…………………………。』

『壕を埋めたり、築地をこしらへたり。御覽なさい、向ふでも營々として今其れを行つてるじやありませんか。』

何時の間にか二人の後には、先刻登り口で摺れ違つた彼の男が蹲踞つて居た。女は睇しⅠ目にちらりと彼に一瞥を與へたが、わざと大きな聲で、

『大體に於て或はさうかも知れません。人生のみでなく寧ろ自然は、より以上の勢力を以て之を營んで居ります。人生の物質的方面はさうと致して、精神的方面は如何でございますの？。』

『益々立體的とでも謂ふ可きでせう。新思想、新學說の發見は、精神的建設、即立體を現すものでせう。』

『現代は精神的方面にも大なる破壞が行はれて居るではございませんか。勿論これは平面化ではございません。因襲や舊慣を盛に打破して、更に眞なるものを新たに建設し創造せやうと致してゐるのは、ほんとに愉快ぢやございませんか。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

話題は最近の文壇に移つた。

『近頃の日本の文壇に就て、先生の御意見を伺はせて下さいまし。』

『彼等の意氣には盛なものがあります。前途ある作家もない事はありますまい。が一般文士の經濟狀態を見ると慨嘆に堪えないものがあります。まだ〳〵我國では食べるための藝術といふ域を脫する事は難い狀態にあります。』

女は之には眞面目に點頭いて置いて小聲に、

『ぢやあ私の藝術などが、眞の藝術なんですね。』

『え？　何ですつて？。』

『オホヽヽヽ、いゝえ何でもありません。』

『貴女は世界的の作家では、誰を崇拜なさいますか。いえさ、同感すると仰有るのは誰です。』

『え、私に？　私はまだ〳〵そんなところまでは達して居りませんわ、知りたい欲求は確かに有つて居りますけど。』

『ローリングさんの家で、御勉強がよく御出來になりますか？。』

『え、すれば隨分出來るんでございませう。實は隨分、慾張つた考でまゐつたんでございい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ますけど、矢張何にも出來ませんわ。する氣がないんではなしする暇も充分あるわけなんですけれど、つまりしないんですね。』
『極つた仕事と云へば、什麼事をなさつていらつしやいますか。』
『別に極つた仕事といふ程でもございません。ローリングさんの手紙を書いたり、たまにはあの方の他愛もない寄書の代筆をする位なものなんでございます。』
『傳道の方などは、ちつとも關係なさいませんか。』
『え、まあちつとも。ですけどよくローリングさんや、Hさんについて訪問に出かける事もございましてよ、しかしそれも一しよに上りこんで、だまあつて、ちよこんと斯うお手々を膝に乘つけて、御行儀よく聽いてるだけ。』
男はくす〳〵笑ひ出した。女は一寸拗ねた樣に嬌態をして、
『だつて私なんか、全く異つた世界からまゐたんですもの、御題目なんか實際困つちまひますわ。それは〳〵お話しにならない、いけない子なんですよ。』
『おや、つまらないでせうね。』
『いゝえさうでもございませんわ、つまらないつたつて仕方がございませんもの、現在は現在で充分幸福を感じて居りますわ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『失禮ですが、どういふ御目的ですか。女流作家にでも……。』

『オヤ〳〵大變でございますね、此人は隨分な我儘っ子のイゴイストでございましてね、何でも束縛される事が大嫌ひ、中でも讀書と旅行がお菓子よりも好きなんださうでございます。』

女が蓮葉に剽輕口を利くのを男は笑つて聞いてゐた。

『やつとの思ひで、好きな事の出來る境遇へ飛び出して來たと思し召せ。先づ生きないでは矢張り好きな、讀書も出來ませず……。だから先刻も私の藝術こそ眞の藝術だつて申上たんですわ、私は藝術のために苦勞こそすれ、藝術を食べるために利用した事は唯の一度だつてございません。アハヽヽヽ。』

『時々は恁う誰も知らない山奥へでも引込んで、一年位片つぱしから好きなものを讀めたら、少しは得心が參るかも知れないなんか思ひますのよ。それとも誰かお金をやるから、生涯旅行をしろつて言はれれば、嬉んで從ひますわ。』

『個人としては隨分面白いお考へですが、人間といふものは何か一つは職業を持たねばならぬ義務があるので、恰度半日位義務的な働をして、その殘りを自由に費したら一番いゝでせう。全く義務や責任のないよりは却つて世の中のたのしみは此中にありませう。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

先程の男は其處に見えないで、彼等は二人きりだつた。

二人は瀧に向つて最後の一瞥を殘して此處を立ち去らうとする時、男は懷からメーテルリンクの『智慧と運命』を取り出した。一見して南北社出版の特徴の菊半截版で、美しい極彩色の裝釘だつた。

『まだお讀みになりませんなら、お貸し申しあげませうか。』彼女は、

『明日はおいとま致さなきやなりませんから。』と言つて辭退した。

『後から郵便で送つて下さればかまひません。まあ是非お讀みになつて御覽なさい。お氣に入れば一冊お購めになつたらいゝでせう。』

彼はメーテルリンクの神祕的思想に、少からず共鳴點を感ずるのであると語つた。

『有難うございます。では拜見させていたゞきます。』

『ぢやあ御別れする時迄斯うして私がお持ち致しませうね。』

『あらさうでございますか、ぢやどうぞ。』

『貴女のお持ちになつてるのは何ですか。』

『え、私？　ほらこんなもの。』

女の懷には小形の、ドン、ジュアンが潜むで居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『ローリングさんには此間會つたのが二度目ですが、何處かデリケートな御婦人ですね。』

『えゝ、そんなにお思ひになりますか。あの方は詩人……と云ふではありませんが、非常に詩をお好きになつて讀んでらつしやいますから、自然そんなところがあるかも知れません。』

『さうでせう、以前此處に居たヴォルトンさんなんか、可成イゴイステイツクなところがありましたが。』

『オヤあんなお奇麗な方でも？　隨分お優しい貴婦人ぢやございませんか。』

『ところが……。』

『ところがどうなんでございますの？　ぢや、只今のボイドさんは？。』

『お話にならない。』

と言つて唯笑つた。

『ローリングさんはほんとにいゝ方でございますよ、日本の國情にも全くよく通じてらつしやいますし、あのオールトミスが、所謂妙な女敎師氣質なんてものは毛ほどもおあんなさらないし。』

二人は旣に全く親密だつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今し彼等は山を降りて行く。先には男が幾分氣乘らしく先に立つて登つた小徑を。互に肩を突き合して談話に熱中した。（つゞく）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

習作——原田皐月

八疊の二階、椽の障子に寄せてテーブル一脚を三脚の椅子が亂雜な位置で取卷く。それと反對の壁際に置かれた小戸棚には硝子戸を通して皿、鉢、食物の餘りの盛られた壺などが見られる。戸棚の上には紅茶道具や醤油の這入つた葡萄酒の壜や、殘り少なのベルモットの壜などが載せられて居る。椽の左手の一間の押入と隣つた床の間には本が、大きいのや小さいのや、古いのや新らしいのやごちや〳〵に積み重ねられてる間々に、火尉斗だの卷いた五線紙や千代紙やが幛かつて如何にも亂雜の中に、紙細貝のあれ樣が五六人しほらしげに埃の中に立つて居る。床をはづれた壁にはコントラバスが帽子や手拭をぶら下げたなげし迄轉軫を伸して部屋中を物々しくして居る。テーブルの脚の邊に丸い瀬戸火鉢と呑み捨てたお茶道具が纒まりなく置かれた凡て夜八時頃の光景、卅二燭が眞中にパツと輝る。

長髮の男 椅子に背を凭せて後に背り返り乍ら、唄の情調に熔け入る樣な表情でシューマンを出來る丈けの聲で唱ふ。

男『……………………』

少女 テーブルに肘を突いて雜誌をまさぐり乍ら何處か皮肉な笑みを浮べて、

少女『何の唄なんです？　これは』

男『………………』唱ひ續ける。

青年。體を半分テーブルの下に入れる樣にして炭取の横に一生懸命木彫の鑿(のみ)を運びつゝ

青年『今夜中に出來る？』

女 少し離れて電燈の眞下で裁縫をして居る。

女『エヽ、出かしたいは』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

少『まあいくら袷羽織でもまさか一日ぢや。家(うち)ぢや朝が遲いんですもの』

女『さう？　でも今夜中に極りをつけないと又明日しなければならないもの』

少『ぢや如何しても？』

女『えゝ』

少『まあぁ』

女『もうぢきよ』

少『そんなにお早いと裁縫も樂しみですはね。解いて洗つて張つて縫つて、出來上る迄に三日かゝらないなんて』

女『フゝゝ。着換のない貧乏人はさう致しませんと年中切れた着物を着なければなりません、ハッハッハッハ』

青『ウフッ』鑿の音ゴリ〳〵す

男　乘り出して『Tちやんも飛んだ男に惚れちやつて一枚羽織になりましたとさ』

三人笑

男　少女に『ねえ、これは獨乙の唄なの。一生懸命惚けて居るのよ。『貴女を見てからは』つて題なの『貴女を見てから私はほんとの幸福と云ふものを知つたつて、そして嬉しい樣な恐い樣な喜びに泣いてる唄さ』

少『へー、貴方の樣ですね』

男『だから僕によく唱へるんぢやありませんか。何しろ此頃の樣によく唱へる事はありやしないよTちやん。今迄は僕探し歩いて探し歩いて夢中に馳け廻つてるの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に、鼻緒が切れたり、溜にはまつたり、車に突當つたり、自轉車にはね飛ばされたりなんか許りしてたんだね。過に綺麗な花だと思つて取つて見ると造花だつたりしてさ。それで焦れ氣味に疲れて居たんだね。これがさ世間體の馬鹿の狂がさ、其探した探した『理解』をたつた獨りから貰つたんだもの。尊い寶だぜ。俺は今宇宙のあらゆる力を掴み得たんだ……。今度の音樂會には屹度Tちやんは僕の心臓を辷り出す血の流れの音を聞くよ。脉が出るの節がいゝのつてんぢやない、俺の血の音が音樂なんだ。ほんとの音樂なんだ。あゝ俺は幸福だなあ』

長髪をやたら引張り乍ら上體を揉む樣に振る。

少『ハハア、、、』強い裂く樣な笑聲

男 満足さうに『さうぢやありませんか。音樂が僕の生命で、趣味で、生活で、そして』

女『もう澤山。あとは澤山』

男『澤山ぢやないッ』重く壓へた樣に甘へて云ふ。

女『澤山』

青『今日ね、僕の隣に描いて居た奴、モデルと巫山戲て許り居やがるの。煩いつてない』

女『あゝ、いゝものが彫れるぢやありませんか』

女の仕立物の上から

少『モデルと？ 裸體で？ まあ！ モデルが饒舌るの？』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女『ね、Hさんは器用よ。御覽なさい』
男『器用は駄目だよ』
女『だつてKさんの様に凡て同一線上にのみ器用なのはいゝぢやありませんか』おどけて云ふ。
男『君の器用は悪い器用だ器用の器用だ』
青『おや〳〵』
男『何しろね君。君位の時は馬車馬見たいに前許り見て行けやいゝんだよ』
青『ウン』コツ〳〵彫る。
男『人なんか何でもいゝんだよ。親父なんか如何でもいゝんだよ。或處まで自分を持つてる人間だと側から集まつて來るもののの中から平氣で自分の物だけ引拔く事が出來るが、君はまだ其處へも行つてないよ』
青『ウン』
男『いゝんだよ。君が强烈な色が使へなくとも。何でもいゝんだよ。そんな事に捕らはれないでいゝんだよ。君は君自身のものさへ大きくして行けやいゝぢないか』
青『さうね。研究所の奴等も皆あたり前の繪を描いてるのね』
女『卵が殼を破つた許りで飛べると思つてるは』
青『一人ね、小笠原だの方々へ行つて描いて來た男が居るの。えゝまだ若いんですよ。そりや大膽な色を使ふの。皆ね其奴の繪は嫌やだつと云つてるけど僕はいゝ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と思ふがなあ』

男『自分の持つてるものは矢張り自分のものだね』

青『僕がね或人のはいゝと思つてそれを眞似るのは、いけないかね?』

女『ウフッ。ほら出た。其處まで考へなくともよささうなものに』頻りに膝の邊を手探る。

男『君は君でいゝんだよ。人は君ぢやないからなあ。君のものにさへなつて了へば何でもいゝんだよ』

少　机の上から下をのぞき乍ら『鋏ですか』

女『イヽエ糸卷』

青『あゝ此處。僕が先刻取つたの』

少『ほんとにお出來になりますね、其分ぢや。もう片袖と前襠丈けでせう』

女『出來るは』

男『ウーン。今日は裁縫許り可愛がつてちつとも俺を可愛がらないッ……』

椅子を離れテーブルを一周りし女の頰と頰を寄せる。

女　笑ひ乍ら『駄目よ。邪魔しちやあ。ほら出來ないぢやありませんか。もうぢきね』

男『ぢや斯う。邪魔?』女の膝と頭を置く。

女笑ひ乍ら手を伸ばして膝の外でくけ物をする。

男『邪魔?』

女『少し。まあいゝはよ』

男　赤ん坊の樣な聲で『だつて今日はちつとも可愛がつて遣らないッ』

少『プウッ、、、。あの聲。アッハ、、、』

男『これでもエライんだよ。ねえッ』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女の針のない手に喰ひ付く。

女『あ痛ッ。煩い〳〵。出來やしないは』

男『ぢや彼方へ行くから一度キスして』

女 笑つて下を向く。

男 立ち上る。

靑『ウフヽヽ』

少 にや〳〵笑ひ乍ら、見ない振りをする。

女『ほんとに煩い人』

男『それだつて傍へ行きたいの我慢してるのなんか嫌や。狐の天ぷら見たいな顔して横目で見てるのなんか嫌やだあ。あと獨言の樣にほんとだ。世の中の馬鹿野郞はこれが藝術でこれが生活でこれが人間でこれが男でつて獨りで勝手に極めて居やがらあ。そして年中無駄な緊張をして居る

……』

椅子に付く。

男『ね君。この俺の樣にウンと緩む事の出來ない奴が女郞買なんかに行くんだぜ。女房の前に威張らざるものは家長にあらずつてな顔をしやがつてなあ』

少『あらいやあだ。女房だつて』

男『女房はいや?』

少『いやぢやありませんか』

女『フフヽヽ』

靑『俺も今に見ろ。皆を燒かしてやるから』

女『この人は夢許り見て居る』

少『ほんとですよ。そんなに貴方はお嫁さんがほしいの』

靑『何んだいッ』 テーブルの下から擧で少女の足

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

袋を打つ。

男『誰の前でも、王者の前でも俺の生活は俺の生活なんだからな。人の前で恥かしい様な要求ならほんとは自分に恥しいわけなんだ』

女『貴方位の男の人は其那夢を考へて喜んで居るものなの？』

青『さうぢやありませんよ。そんな事考へやしませんよ。僕すてきな繪を描いて……

……』

男『やあ、今日の新聞は少し面白い事を云つてるよ』

女『私見なかつた』

少『身の上相談ですか』

男『不用意だつたと云ふ事はいつでもさうした慘めな結果を齎しますつてさ。ほんとだ』

女『何の相談？』

男『女がねお醫者に欺かれたんだね。出戻りの女が、女なんだね』新聞を見入る。

青『何あんだ』

少『何を云つて被入るんでせう？』

女『ウフヽヽヽ』

男『あのね。その女が病氣になつて入院したのさ。そのお醫者さんが大變に深切だつたので、それから色々してね、お醫者がその女を妻に貰ふと云ふ處まで行つたの。處がこの頃になつて外の看護婦と婚禮する日までもう定まつてると云ふ事が分つたのでその女は毎日〳〵悲しみに泣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いて居るが如何したらよかうと云ふのさ』

女『おや〳〵泣いて許り居ても仕方がないはね。自分の事は自分で如何かしなくちやね。だけど實際騙されてるのか戀されてるのか戀してる當人にや分らないはね、騙されてると思へば戀もしないんだから』

甲斐絹の音がシユー〳〵する。

男『其處だよ。危いのは。男つて奴は細心な女と見ると戀してる樣に見せかけて其實内許り漁らうとするからね。若い女の留意しなければならないのは』

女『若い女は其處まで自分の識別の進んでゐない事が多い……』針がずん〳〵進む。

男『僕なんかさう思ふね。藝術が俺を殺すなら殺せ、騙すなら騙せさ。Tちやんだつてさうだ。俺は騙され樣と殺され樣とそれでなければならないんだから仕方がない』

少『ドウ　ユー　シー　ザ　リツトルボールド』

青『何だ、いきなり。妙な人だなあ』

少『ドウ　ユー　シー……』

青『Iちやんは隨分をかしい人ですよ。ネストとエツグを違へたり、ホワイトとリツトルと取違へたりするんだからなあ』

女『フ、、、』

男　英語を字の形で覺え樣なんて投機的な野心を起すからさ』

少『ドウ　ユー　シー……』

女『プウッ、、。何を云つてるの嘘見たいに。この人はこの頃餘程變よ』

男『隨分變つたね』

少『私？　そんなに？　虚言許りッ』

女『この三年位私は貴女を見てるはね。こんなに變るものでせうか誰でも。どん〳〵變て行くんですもの。然もこの三週間許りは烈しいはね』

青『人生の轉換期』

女『私ほんとに生理的に此那に變化のあるものだなんて知らなかつてよ。私自身に經驗しなかつたからでせうけれど、Ｉちやんにや全く驚かされてるのよ。自分にや氣が付かなくて？』

少『えゝ。そんな變りましたの？、尤もこの頃本が讀めなくなりましたよ。幾等一生懸命讀んで居ても頭の中にふつと別な事が見えたりなんかして、それで夜もよく眼が醒めるんですの』

女『晝間も隨分ぼんやりしてるはね』

少『さう被仰れば變つたんでせうか。私はちつとも氣が付かなかつたけど』

女『自分には分らないでせうね。餘程内省しなければ。だから危險なのね。自分で今が生理的の變り目だなと云ふ事をよく自覺して其時機の運動と客觀して行く樣に行く樣に注意して居なかつたらほんとに側から見ては危いはね。何しろ御當人が渦の中へはまり込んでぐる〳〵知らず

に廻つてるんですものね』。

男『さうさね。何と云ふ見定めもなく方向も選ばずそれこそめちや／＼に馳け出したがるから』

青『おや。下で今頃ごし／＼鋸引をはじめたよ』

男『下ぢや何をして毎晩一時二時迄起きてるんだらうと思つて隨分不思議だらうね。機械的の勞働より尊いもののない人達にはね』

女『えゝ。然し御機嫌が惡いのよ。夜遲くて朝遲くて隨分だらしがないと思ふんでせうね。作は親切なんですけど、お神さんは怒つてるんですとさ。ねえＩちやん木戸の締め樣が遲いとか何とか怒つてたつてねえ』

少　不安さうに『どうしたら變らないんでせうか』

女『まあまた云つてるの？　その事を』

青『事は君さつさと片づけて行くものだよ』

女『人間が變らなかつたらそれこそ大變ぢやありませんか。變つたつていゝのよ。さう云ふ時期なんだから。只ね眞當の要求の積りで飛び出すのが、案外其時期の道具に使はれて居る事があると云ふ事を知つてればいゝのよ。遣り直せば取返しは付くものゝ大變な損ですからね』

男『取返しの付くうちはいゝが惡くすると破碎されて了ふ』

女『だから上手なお守りと眞面目な内省が入るのよ。丁度其時機は眞當のものが生理的要求の中側に沈づんでる形なんでせう？　さう云ふ上に立つて居ると云ふ事を知り乍ら其不可抗力に身を任せ乍ら其も一つ奥のものを見る樣に氣を付けるんだはね。と云つて口で云ふ樣にや行きあしないから先に通り越して來た深切な人が後から來る人を見て居てやらなければね』

青『あゝあ、何か食べない？　ね隨分彫れたでせう？』

女『ほんとね。くたぶれるでせう。貴方又テーブルの下で彫らなくてもいゝぢやありませんか』

青『エヘ、、、』

女『私も休まう、もうぢきだから』

仕事を片よせて長煙草をとる。

男『俺も腹がへつた』

女『ウフッ、、、皆正直ね。お素麵ぢやお腹が承知しないんでせう。私も少し口持不沙汰になつて來た』

女立ち上りテーブルの抽出から財布を出して見る。

女『拾七錢五厘あつてよ。拾錢は明日の朝の分としてあと七錢五厘何でも買つ被て入いよ。Hさん』

青『いゝの使つても』

女『何故？』

女の煙管から細い煙が昇る。

男『ベルモットを呑まない？』

青『何を買つて來ようかなあ』

青年出て行く。

女『もう暖かくなつたからお壽司の立食ひも出來ますね』

少『まあ食べる事許り……』笑ふ。

折から外の靜かさを破つて支那そばの笛がゆるく流れる。

三人顔見合せて哄笑。

三人『…………』（完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東郷ペン

岡田八千代

丸善のオリオンがこわれてから三越で小形の萬年筆を買たのはもう餘程前になります。それがいつの間にか落したとも亡くしたとも無く見えなくなつてしまつてからは、私は仕方なしに又暫くは普通のペンを用はなくてはならなくなりました。普通のペンと云つても私にはどうしてもGペンのやうなのはギー〱引かゝつてどうしてもうまく用ゐられないので困つたと思つてる處へ丁度よそから貰ひ合せたのが、先の尖の一寸上へ反つた大金色をしたのに、黒いハガネのやうな色をしたのが二重に冠さつた「東郷ペン」だつたのです。これは紙に觸れても不愉快な音もせず、字も割合に柔らかく書けるので、それからと云ふもの私は此東郷ペンばかりを用ふ事になつたのです。まづ今後幾年かの後まで——或ひは永久に——私はこれを用はなくてはなるまいかと思つてをります。少なくも今後、三越で買つた萬年筆よりもより以上の萬年筆が買へるまでは用はなくてはなるまいかと思つてをります。なぜならば、此ペンは五圓で買つた三越のよりもずつと書き好いのですし、今の處私には前に買つたもの以上の萬年筆を入れる時期がいつ來るかは覺束ない望みなのですから。

さて私は此ペンによつて今から、その日の見た事聞いた事思つた事などを順序も無く書いて行かうと思つてゐます、元より人に秀いてた才もなく、學問も深くない私の事ですから。中にはかなり

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

間違つた事も可笑しい事もあらうと思ひますが、それはどうぞ陰で嘲けらずに表だつて笑つても下さり教へても戴き度いと思つてゐるのです。

赤曜會の展覧會へ行つて見る。夕日が岡と云ふのは目黒と惠比壽の兩停車場の間にある元青木子爵の邸内なのだ。二三年前に砂糖と牛乳とを持つて苺を食べに行つた時とは持主が變つて掃除が行き届く故かズッと森の木などの手入れもとゞいて見違へるやうに奇麗になつて居た。その時苺を洗つて貰つた家には今中田鷄村氏が住はれて之も建て直したのかと思ふばかりに奇麗になつてゐる。會場といふのは丁度芝生が芽をふいて青くならうとしてる上に天幕を張つてその中に日本繪が並べられてあるのだ。天幕の中にゐても好い心持、又外へ出ると格別の好い心持であつた。私達は歸り道にその邸内にある大きな池の方へ廻つて見た。池には相變らず葦（よし）が生へてゐる　けれ共水が以前よりは大變に濁つてゐた。まだ此池が「青木の池」と云はれてる時分によく此處へ寫生に來た若い女や男の畫家は、あの池の直き上に住んでゐた山番の者に金をゆすられたものだ。池からぬけて踏切からエビスビール會社の裏門の處から元舞臺協會の方々の住んでゐられた二階家の脇を通つた。今は誰のお住居なのか、奇麗に刈り込んだ芝生の上に暖かさうに差した春の日の中に大きな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

鳥籠がいくつか並べて出してあつた。空は眞青に晴れてゐた。（二、一五）

『恤兵展覽會で○氏にお逢ひでしたらう』

とＸ氏が云つた。

『それでね、あなたの事をね、いつもあんなにムッとした人なのか、笑ひさうもないぢやないかと云つてましたよ。』（二、一八）

Ａ子と一處に錢湯へ行つて髮を洗つた。歸りにＴ氏のお宅へ奥さんのお見舞に寄るとも う奥さんは床を離れてゐられる、暖かい椽側で山羊を見ながら髮を干かして歸る。

（二、二一）

お膳の前に座つてからお菜の惡口を云はれるほど其處の主婦にとつて嫌な事はない。それで此頃はよく「料理の友」と云ふ本を讀む、この本の料理法は量目（めかた）も方法も大變によく分るやうに書いてある。又この節では岡野の奥さんの處から送つて下さる「料理研究」と云ふのをよく拜見する。しかし我々のやうに月給でその日その日を送るものには鯛の何々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

蒸しとか肉のビフテキなんどと云ふのよりも、さつま芋や、さと芋をどう煮たら甘いのかその方法が知りたいものである。豆腐や三ッ葉の切り方よりも「すまし汁」をうまく造る方法をもつと細かしく知りたいと思ふのである。

好かれ惡しかれ膳に付いたものを興味ありげに食べられるのは嬉しいものであるけれ共、新聞をよみながら不機嫌な顏して五分もかゝらずに食べられてしまふのは全く其處の主婦や下女の身にとつては張合のない事に違ひない。

その人に確かに出來ると信じて頼むことをいつまでもいつまでもして呉れぬほど氣持の惡いものはない、その癖そんな人に限つて、もう見限りを付けて一旦頼んだ事も止めにするとしつこく詫びて來てそれを仕樣と云ふ、私はかう云ふ人を大變に嫌つてゐる。そして自分にもさう云ふ處のあるのを大變に悲しんでゐる。

余りお天氣が好いと私はいつも心が落ちつかない、そしてそんな時一人靜かに日の當る窓際にでも腰かけてゐると不思議にもの悲しい心になつて涙がさしぐんで來る。

（三、三）

三越の洋書展覽會と銀座美術館の小林萬吾さんの展覽會と書博堂の四人展覽會とを見る、三越は余りゴタ〳〵してゐたので陸に見られなかつた、小林さんのでは三一の「馬車」と云ふのが大變に好きだつた。馬車のほろに木の間をすけた日ざしの落ちてる邊が何ともいへぬいゝ心持であつた。書博堂のでは奥村さんの彫つた蹈臺は、あの勞力を何故外のものにたさらなかつたのだらうと思つた。少なくも私にはあの蹈臺を足で蹈んまへる丈の無遠慮は出來ない、さうかと云つてどう見ても床の間へ飾れる形のものではない。「しやもじ」は北海道名物のやうで面白くなかつた。自畫像は左團次に似てゐて御自分には似てゐない。（三、六）

有樂座を見た。少し遲れて行つたので「出雲崎の遊女」が見られなかつたのは殘念だつた。

第二の喜劇「親友」と云ふのは飜案物ださうだが面白かつた、登場人物の詩人と云ふのがも少し深く書けてると尙好いと思つた。今の中は飜案物でもなんでも好いから面白いものが澤山見せて貰ひ度い。出來ないお稽古の子でも頭さへあるならば毎日毎日上手な御師

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

匠さんの唄なり業なりを見てる中には、きつと何かしまひには得るものがあるに違ひないのだから。いくら頭があつても全で盲目さぐりでは上達も遲いに違ひあるまい。

女優の中では郁香八千代と云ふのが癖が無くて望みがありさうだ。香川玉枝は達者過ぎる嫌がある。そしてあんまり生てゆくので形が惡いのは考へものだ。二條京子はこれも車輪すぎて不可ない、端との調和がまるでとれてゐない。櫻井八重子、なか〳〵憶面が無い、その替り品も無い、然し役によつては存外の手柄をしそうに思はれる。

男優ではオペラ部の南部は高田そつくりだ、然し高田をはつてると云ふ風にも見えないから恐らくあれが此人の藝風なのであらう、今度は何處までも眞面目なのが好い、殊に大詰で狐を打つて來てからが當込が無くて好い。當は厭だ、顏の裝りもわざとらしいし、手付が多くて日本人のやうぢや無い、只輕薄らしい處が適つてゐるだけだ、大村はあの無愛想な顏だけが適つてゐた。木下はも少し舞臺を尊敬するやうにさせ度い。三好は好い、一生懸命な處を買ふ。東儀氏は相變らず上手いものだ、この人の藝風は時とすると當込のやうに見える事がある、けれ共私は決してあれは當込では無いと思つてゐる、第二幕でかね子に向つて自分も若い時には隨分戀もしたしかも熱烈なのをやつた、そして失敗したと云ふ處の調子などがその例であらうと思ふ、あゝ云ふ白をあゝ云ふ風に當込なしに云へるの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は豪いと思ふ。結婚問題になつてからそれとなくかね子を思ふと云ふ心を只こゝろもちに見せる邊の情合のあるのにも感服した、大詰で頓智を働かす處で一々息を呑むやうにして白を云ふのは此人物としてちつと小心のやうで厭だつたが、主人から出入を斷られて默つて引うける處は如何にも其人らしい自然だつた。

第三の夢遊病は此前も一度帝劇で見たのだが、今度もリザとアレキシスとの役が替つただけで演つてゐる。然しリザは此前の時の人の方がずつと好い出來であつた。淸水のロドルホ伯も松山のエルヴイノも好い、信子のアミナは白を聞くと甘つたれてゝ厭になる、もつと誰かに白の叱言をしつかりと云つて貰ふと好い。（三、六）

唄の歌へない人ほど氣の毒なものは無い、悲しい時、嬉しい時、それはどんなに淋しい人の心を助けるか分らない。

逢つた事も話した事も無い人から噂される位迷惑な事は無い。ましてそれで定められた評價ほど危險なものは無い。（三、七）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大雪の中を千章館の連中で本郷座へ行つた。狂言は鏡花氏の小説「日本橋」を脚色したものだ。「日本橋」と云ふ名は大變に氣が利いてると思ふ。けれども、今のあの恐ろしい動物のまつはつてる日本橋を思ふとなんだか違つた氣持になる。まして、ふだんあの橋に電燈がすつかり點がない時を考へると、私には石橋のさゝいよりはあの今の日本橋の翼のある動物の方が薄月の夜には祟りさうに思はれてならない。

泉さんの御作についてこんな事を云ふのは野暮かも知れないが、此作の葛木は湯島まうでの神月を思はせて仕様が無い、そして伊井の葛木は、その神月に最もよく似た大學々理教室の場が一番に好い。喜多村のお孝は鬘の前髮の分目を薄赤くしたのは寫眞のつもりかも知れないけれど濃い髮の分目は眞白で無くてはいけない、赤いと禿げてるやうにしか見えない。序幕の一石橋の赤つぽい茶に州濱のやうな模樣のついた着付は好い、次の待合で襟付のお召の着付も好いが、淺黄の半襟はあんまり此人には寫らない、たしか稽古扇のお藤の時にもあゝした襟を用つたやうだが似合はなかつた。その次ぎの家の場で浴衣を重ねた襟付の紺地にせうぎの駒を染めぬいた廣袖の着付は好い。然し此時しめてゐる赤地に白の角通しの伊達卷と、下に重ねた浴衣とは凝つては思案に能はずと云ふ形がある。その時に被る半纏は地色も好し柄も好い、だが此人はあんまり裾のさばけないと云ふ事が分つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

次に一石橋に出た時の薄色の着付は雪景色に對して白つぽいし、滋蛇の目さうつりも惡くて感服出來なかつた。此處の引込は馬鹿に氣に入つた。しかし本で讀んだお孝らしくはない、むしろ、湯島までの蝶吉に近かつた。次の學理室の場は丸髷で大島か何かの着付に黑の羽織で地味なのは好いが、此羽織の前の返りが大變淺いのと着物の襟元が薄くて貧相に見えたのが氣になつた、次の家の場の反古染の着付は長襦袢の柄のやうだつた、それに帶の巾が狹くて白つぽいのに菖蒲が何かのついた柄がメリンス染みて厭だつた。此時の「花が散る花が散る」の引込は稽古扇を思ひ出した。水菓子屋の前で傳吾を刺す處は好いが正氣に歸つてからはあんまり云ふほどの事はして無い。急に正氣に歸る筋が不自然なからかもしれない。小織は上手いとは思つたが傳吾は此人には向はぬ役だ。賫澤のやうだが私は此人が中村に憲兵をして貰ひたかつた。熊谷の憲兵は何の價値も無い。中村の植木屋は福島の飴屋と替つた方が互ひに好い、木村の淸葉は火事場丈が大出來であつた、花柳のお千世は火事になつて長襦袢一ッで包をこしらへてる處の恐怖におそはれた樣子が出來た。石川の小紅屋の女房は、後家を立てゝ一家をやつてる人にしては色けつぽ過ぎる。田中のお通は誰かゞホーカイ屋の子だと云はれたがよく當つてゐた。酒井の近眼の藝者はよく演つてゐた。なか〳〵細かい。輕薄らしい處もよく見せてゐた。小紅屋の前へ出る子供はみん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な能く演つてゐた、殊に千崎彌五郎は拔群の出來でござる。瀨戸の小紅屋の小僧も好い、吉岡と云ふ人は器用なものだ。役の中では待合の女中が一番好い。藤井と水野との仕事師が柳の露路に立つてる處は「玄武朱雀」を思はせて心地が好かつた。あれで水野が訛らなければ猶好いと思つた。それに少し二人きりの白が長過ぎたのでダレた。

中村の持つて出るけしの花は好く出來てゐた。小織の懷中から出た緋の長襦袢の色氣も好かつた。（三、一三）

目を覺ますと書室でうたゝ寢をしてしまつてゐたのだ、見るとストーヴの火のとろ〳〵燃えてる前で主人も外套を冠つて眠つてゐる。庭ではしきりに鶯が鳴いてゐる。沈丁字の匂ふ暖かな好い日映しの朝である。（三、一五）

庭のも鉢のも蕾がしきりに咲く、花を取る事の嫌ひな私はいつもは自分で摘んだ事はめつたに無かつたのだが、今年は、ある鉢の花が二ツ咲いて蕾の二ツあつた時、ためしにその花を摘んで見ると、あとの蕾が前に咲いた花にも劣らぬ位大きく咲いたので、それからと云ふものは花が開ききるとはどん〳〵摘んで小さいコップに差して日當りの好い窓に置

いてやる事にした、地の菫もその爲めに前の花が實を結ばないので好い花があとからあとからと咲く、摘んだ花もよく水を上げて好い香りに匂つて居る。（三、一六）

窓に置いた菫の中の水をシャコ（猫）が大方呑んでしまつた。（三、一七）

田中屋の梅原良三郎さんの展覽會と伊藤松坂屋の赤鳥會の展覽會と上野の美術院習作展覽會とを見た、梅原さんのは一番右の端の上になつた椿の花が「手に入つた作だ」と云ふ事を思はせた。赤鳥會では人形が面白かつた。似顏繪は寫眞から取つたのが多いので興味が薄かつた。美術院のでは橋本己之助と云ふお人と何と云ふ題かしらないが雪の中に鉢が二ツ並んでるのが好きだつた。

美術院の展覽會を出て向ふを見るとズツと地が車坂の方へ落ち込んでる處に縱の大木があつて、その木の脇から美しい空が誘けて見えてゐる處がある、私はあすこの處が大變に氣に入つてしまつた。（三、一八）

薄桃色のヒヤシンスの花が咲いた、菫水仙の蕾が今にもはぢけさうにふくらんでゐる。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

薇の枝には赤い芽が澤山に付いた。ぢんてうげの花がみんな咲いた。白たんぽは遠から咲いてもち草がもう摘んでも好い程に延びた。今朝隣りの子が裏庭の菊の芽をいつの間にかみんな摘んでしまつた。そしてお家へ持つていつて煮て貰うのだと云つてゐる。

春があつちからもこつちからも首を出して來たのだ。（三、一九）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

おぼろ夜——有田勢伊

葉山か熱海へ轉地を勸める醫師の詞を强情に拆けて、照子が上野を立つたのは、霰まぢりに冷い雨のふる霜月の末であつた。

父と母と看護婦の手に支へられながら、血の氣の失せた蠟のやうに冷い照子の顏が汽車の窓に現れた時、見送りに來た友人や從兄姉達の眼は、みんな哀し相にうるんでゐた。

平常から泪もろい從姉は窓緣に縋つて身を顫はせながらはふり落つる泪に顏を得上げなんだ。『到底も駄目でせう』と言つた病院の博士の詞は人々の口から耳へと傳へられて、患者仲間や看護婦達は、遙々と生れ古郷の島へ迄自身の骨を埋めに旅立つ照子の果敢ない命を憫れむのであつた。

狹い一等室の中は照子達の外には金緣眼鏡の氣むづかし相な老紳士と子供を伴れた夫婦とばかりであつた。

窓外の景色は黄色く霜枯れて越後や信州の高い山には、もう雪が來てゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

照子は淺黃縮緬のお高祖頭巾の中から力の拔けた眸を、流れるやうにして移り變つて來る景色の上に、滑らしながら、ぼんやりと、遺して來た東京のことは、もうすつかり打忘れたやうに、古鄕に自分を待つてゐる祖母や妹や從姉達のことをばかり思ひつゞけるのであつた。今の照子にはそれがせめてもの慰めである。照子は三月の長い間を腹痛や盜汗の爲に苦しみ悶えてゐた病院を出たことが死を遁れた程にうれしかつた。

朝立てば晚に着かれる筈の里程を照子達は三日かゝつて新潟へ著いた。危ぶまれながらも一日一日と延びてゆく照子の命は母や看護婦の胸を不安な悅びに躍らしてゐた。新潟で診察をして貰つた醫師は照子の重患を見た後。是から荒海を越えて寒い島へ渡るつもりで東京から來た。といふ看護婦の說明を聞かされた時には其無謀に呆れたといふ風に霎時の間は照子の面を瞻るのであつた。けれど、『何んでもよいから唯國へ歸りたい』といふ一念に凡てを托して樂觀してゐる照子の平靜な態度を見ては强ひて渡海を思ひ止まらせやうともしなかつた。

一週間の船待ちの後に島通ひの汽船は、やつと港を出ることになつた。照子の病體は濱でも亦みんなに氣を揉ませた。解船のかへして來る間を倂の蹴込に腰かけながら憩ふてゐる照子の體を、母と看護婦とが、寒い濱風にあてないやうにと、大事相に袖圍ひをしてゐ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るのを見て、一人の老ぼれた巡査は。重病人の上船はさし止めなければならぬ、と云ひ張つた。父と船長とは熱心に巡査を說き伏せやうとしてゐたがどうしても巡査は許さうとは言はなかつた。仕方がないので伴れて來た車夫の一人を病院へ走らせて醫師の證明書で、やつと巡査を得心させることが出來た。

海は非常に荒れてゐた。猛り狂ふ浪の飛沫が絕えず船の甲板を洗つて乘客はみんな苦しむな呻き聲を立てゝゐた。照子は寢臺の上に石像のやうに仰臥したまゝ、必死の戰場に臨むだもののやうに張り詰めた其心を緩めないやうにと努力するために、船暈の苦痛を少しも知らなかつた。これ程の大時化に病人の照子が一人船暈しなかつたといふことが、島へ着いた後、人々の間に奇蹟のやうに云ひ傳へられた。

歸國してから、照子の病氣は洗ひ流すやうにして、快方に向つた。深切な看護婦は自分の心づくしの効果を見て非常に悅んだ。そして朝夕の體温も略穩かになつて、大分元氣らしくなつて來た照子を見た時に、東京へ歸らうと言ひ出した。怜悧な渠女は島の人達とも如才なく交際つてゐたので、渠女の歸京は質朴な島人達に非常に惜しがられた。夕方の散歩の折に海岸の小石の中から渠女が東京の友人への土產にと拾ひ集めた赤い碼瑙や紫の水

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

品の他に島人から贈られた鰯や干あわびなどを邪魔になる程行李に充めて東京へ歸つて行つたのは、吹き初めた涼風に島めぐる波の立ち騷ぐ九月の末頃であつた。

照子は看護婦がゐなくなつてからは、嫌ひなミルクや鷄卵を强ひてすゝめたり、戶外の運動に嚴重な監督をするものがゐなくなつたことがうれしくて堪らなかつた。寒い濱風の中に何時迄も思索に耽つてゐたり、冷たい星の下で夜露に曝されてゐたりしても咎めるものゝない氣儘な放逸な氣分に、出發の時着護婦が繰りかへし繰りかへし言ひ遺した深切な注意などを憶ひ起すこともなく、束縛を放れた、自由な歡びに浸つてゐるのであつた。

けれど、そうした歡びも長くはつゞかなかつた。寂寥が渠女の心に襲ひかゝつて來た。照子はふと自分の周圍を見まはした時、急に心細くなつて來た。たよりない、淋しい、淚の出るやうな哀しい心持になつたり、焦れつたいやうな、凝としてはゐられないやうな、いらいらとはがゆい氣分になつたりした。

寒い冬の朝、天秤棒を擔いで汗にまみれて通る勞働者が羨ましかつたり、尻切れ草履やぺしやんこの下駄はいてかけつこをする穢ない町の子が羨ましかつたり、いつそ、一思ひに裸身で水の中にとび込んで見たいやうな氣になつたり、血を吐いて倒れる程の激しい勞役がして見たいと思つたりした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

温かい喰べ物、柔かい着物、輕い夜具、そんな物はみんな厭はしくなつて來た。もう何んにも要らない、裸身で手足の痺れるまで働きたいと照子は思つた。看護婦がゐなくなつてから照子についてゐる婢が忠勤ぶりに始終從いてまはるのが邪魔で堪らなくなつた。おづおづと襖の蔭から婢の顏が現はれると、わけもなく唯にくらしくなつて險貪に怒り散らしたりした。

照子は、わざと寒い風の渡る椽端に寢そべつて泣いて見たり、暗闇に庭の飛び石を裸足でわたつて見たりするのでは慊らなくなつた。照子はいつかの土用干の折にナイフ代りにすると言つて、母から貰つて置いた、赤銅の地に金で浮世繪を浮彫にした目貫のことを、ふと憶ひ出した。そして箪笥の抽斗から机の抽斗の中にそつと、それを忍ばせた。

襖の外に音に耳をすましてから後に照子は目貫をとり出した。初めは厚いショールの上から、そつと喉をついて見たが、それは唯指尖でついた時のやうなにぶい刺戟より外與へられなかつた。次には腕に力を入れてグツと押して見たが、今度も少し息を苦しくしたばかりで目貫の尖は、やはりショールを透さなかつた。照子は思ひ切つてショールをかい捨てた。けれど細く鋭くとがつた刄物の白い冷たい光りは、一時に、はり詰めた勇氣を挫いてしまつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

照子は兩袖の間から僅かに現はれた目貫の尖で薄い喉の皮膚をチクリ〳〵と突ついては、自分の神經を脅かして、其小氣味のよい感覺をなぐさむでゐたが、しまひには喉の皮膚が少し破れて、刄物の尖が血に曇つて見えた時、普段から、血を見ることを非常に怖れるたちの照子は、それを見るとギョッとして、火の附いた物を投げるやうに、慌てゝ目貫を放り出してしまつた。そして自分が或悲劇の中のヒロインでもあるやうに思はれて、何とも言ひやうのない、一種不思議な、快感を伴つた哀しみに、心ゆくばかり、すゝり泣いた。

莢四目に組んだ垣根の側に半疊位の、岩石の形をした、眞赤な庭石が据えてある。それは強く日光の照る時には白けた薄色に褪せて、雨に濡らされると、つや〳〵しい、濃い赤色に染め出された。

照子は片手に、小さい薔薇の模樣のついた、白い珈琲茶碗を振り擧げながら幾度かためらつた末に、赤石目がけてパッと、それを投げつけた。茶碗はカッと小さい響を立てゝ、刹那に赤石の面には、白い破片が雪のやうに美しく砕け散つた。はつと、胸躍らせながら驚き見張つた照子の眸は、雯時の間は、勝利に誇るらしい、歡びの色に赫いてゐたが、やがて其笑顔は次第に力ない寂しい蒼白い影に蔽はれていつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

冬の永い島でも、もう椿は落ち散つて、八重も一重も一時に櫻の盛りとなつた。一日〳〵に緑がかつてゆく裏山には、鶯が頻りに聲を張りあげて、おどけたみゝづくの聲が其間を綴つて啼く長閑かな季節となつた。

椽の板敷の上にメリンスの座蒲團を幾つも並べて、手に持つ雜誌で顏に日蔭をしながら、其上に横はつた照子は、清く拭き込んだやうな碧空に、スーッと一刷毛撫でた白い雲のあたりを眠と見詰めてゐると陽春ののどかさが泌々と感ぜられた。

寂かな四邊の光景に照子は、廣い天地に自分一人が住むやうな心細さをおぼえて、わけもなく人懐かしいやうな、胸痛い迄にやる瀬のない、憧れ心地になるのであつた。

照子ははづみを喰つたやうに、つと吻ね起きた。そして裏木戸の閂をはづすと一目散に、岩角の出た、じめ〳〵と清水の流れ出てゐる細い山途を、セイ〳〵と息を切らしながら登つていつた。登りつめた山の上にはお玉杓子が、せわしく尾をふる、綺麗に水の澄んだ田圃が並んでゐた。照子は、そこ、爰に、根づよく枯れ殘つてゐる雜草を燒いたり、のびるを摘むだりしてゐる人達に見つけられないやうにと、そつと急ぎ足に畦途を辿つていつた。

やがて十分ばかりの後に、照子の小さい體軀は大きな沼の岸に現はれた。沼の水面は蒼

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い空の色を映して深々と怖ろしげに澄んでゐた。

岸には青いすぎなに雜つて紫の菫が一パイに咲き亂れてゐた。照子は木陰に身を寄せて眤と沼の面に見入りながら、つぎから、つぎから、つぎと空想をつゞつていつた。

照子は讀むだ小說の中から、入水をしたヒロインを探し出して見た。其等の人々の死屍は皆夢幻的な美を備へたところの立派な藝術品であつた。照子は幾度もくりかへして讀むだことのある金色夜叉の『淺瀨にかゝれる宮が骸……』といふ句を憶ひ出した時、長い黑髮が水に濡れてつや／＼して肩に垂れかゝり、膨んだやうに調つた、美しい顏は眠つたやうに靜かに閉ぢてゐて、そして着物の紅絹裏が白繊い手足にまつはつてゐる宮の美しい骸が髣髴と目前に現はれて來た。

それから、照子は自分が今若しも此沼に沈んで死んだら什麼であらうかと想つて見た。蒼く水腫れた顏面やうなじには、水に濡れた髮毛が氣味惡く纒ひついて、醜くはたかつた著物の下からは艶の失せた四肢がしまりなくだらりと延び出てゐるであらう。其上に一週間も經つてから。それが見出されるならば醜く腐爛した眼や口の端からは、いまはしい惡臭を放つであらう。そして通りがゝりの見も知らぬ人の輕浮な侮蔑的な詞によつて、町の人達に傳へられるであらうか。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

照子は今、惡夢から醒めたやうにゾッとして身を顫はした。沼の面は凄く赫いてゐる。照子は追はれるやうにして、木陰を去るや、一散に元來た途へひきかへして往つた。

照子は今湯殿を出て湯氣に蒸された紅い頰に濡れ手拭を推しあてながら茶の間へ這入つて來た。そこには、火鉢の側に祖母がしよんぼりと寂しい影を浮べて居眠をしてゐた。二つのラムプの光は廣い土間の隅までは屆いてゐない。掛時計のセコンドを刻む音がやかましく耳に就く靜かな宵であつた。

砂にそは〳〵として落ち著かない足を照子は、あてもなく客間の方へと運んで往つた。人氣のない座敷の疊は湯上りの柔かい足の裏を冷たく刺戟した。客間に隣つて、他に向いて照子の机が捲えてある、小さい部屋がある。日光は椽側から斜に、照子の部屋の片隅を明るく照し出してゐた。其反射が細長い柱鏡の中に冷たく流れ込んでゐる。照子は鏡の前に立つて薄明るい中に白く浮いて見える自分の顏を飽かず眺めてゐた。それは是迄に見たことのない美しさであつた。照子はふと變な心持になつた。五彩の糸で胸を絡められるやうに、いろ〳〵の追憶や想像が縺れ合つて心を搔きみだした。

何の誇も持たずに咲いて散つてしまふ深山の花のやうに、自分の若さも此まゝに寂しく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

腑甲斐なく消え去るのであらうか。そう思ふと照子は遽に自分の身が尊いものに考へられるのである。此尊い若さを空しくとり逼してはならぬ。自分は出來る丈多量の歡樂を此若さに吸ひ込ませて置かなければならぬと思つた。

照子は色彩の變化のとぼしい現在の自分の生活を思つて堪らなく淋しい、なさけない心持になつた。

ぼかし繪のやうにうるんだ圓い月が山の端に近く薄白い空に浮んでゐる。四圍は閒として音がない。

照子は椽の端に佇つて霎時の間、庭の隅の樹立の間へ視線を走せてゐたが、やがて何を思つたか、ふいと氣のふれた者のやうに、裸足のまゝで庭へ飛び下りた。そして飛石傳ひに、庭の中ほどに、黑い土藏の羽目板を背景にして白く、くつきりと、雲のやうに叢り咲いてゐる八重櫻の下に立つた。それから櫻の幹にヒタッと身を寄せて、なつかしげに、瞳をうるませながら眤と花に見入つた。

照子は稚い時から此櫻が大好きであつた。春の來る毎に此花の咲くのを何よりの樂しみにして待ちわびたものだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

照子は東京にゐた頃は櫻の名所といへば市内はどこでも、小金井でも飛鳥山でも、來る春毎にお花見をかゝしたことはなかつた。けれど此櫻程に懷かしみのある櫻はないと思つた。

家の中でも照子程此櫻に親しみを感じてゐるものはゐないので、照子は自分がゐなければ誰も眺めて呉れるものもなしに、寂しく此花が咲いて散つてしまふであらうと、それが哀しかつた。

照子は凝乎と振り仰いで、花を見詰めてゐたが、花は何時迄も動かうとはしない。

照子は何だか焦々としてきて、花に情のないのが物足りないやうで、やる瀬のない、もどかしい、哀しい何とも云ひやうのない哀愁に熱い泪が頰を傳ふて流れた。ふと氣づけば遠くの方で微かな浪の音が引いてゐる。其瞬間に照子の心明るい光りに照らされるやうに感じた。

歡樂の巷!! 若い淋しい者の往くところがそこにあるではないか。

照子はいそ〳〵と家に這入つて、伯母と從兄の龍雄とに料亭の住吉へ遊びに往かうと言つた。

不意を喰つて呆氣にとられてゐる伯母を促し立てゝ戸外へ出たのは、もう十時を大分廻

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた頃であつた。

紙問屋の幸造さんを誘つて、薄月の光にボンヤリと地ににじむ四ツの陰影に導かれながら、四人は細い柳の葉の煙る住吉の軒に後影を沒した。

案内された三階の間は南と北とに山を見晴らす可成に廣い座敷であつた。少時あつて、頸筋のくつきりと白い、肩の狹い年増な藝者が三味線と一緒に這入つて來た。小さんと言つて其頃××町ではたつた一人の藝を賣る藝者と云はれる妓であつた。

お座つきが濟んで、幸造さんと龍雄との間を頻りに盃が飛び交はす頃、『今晩』はといふ愛らしい聲を先だてゝ閾ぎはに、桃われの、しなやかな頭がうつむいた。頰のふくよかな、少し眦の上がつた愛くるしい妓であつた。此土地では半玉といふものゝ鑑札を許さないので梅奴はまだ端物もろくに彈けない、十五になつたばかりの年でも、もう一本の鑑札で御座敷へ出てゐた。

酒を飮まない照子のためにシトロンが運ばれた。

手ざわりの冷たい、平常着の、糸織の羽織の袖を重ねて、窓の障子に背を凭せて、推し默つたまゝに、しよんぼりと盃の行末を見詰めてゐる照子の側に、シトロンの罎に手をかけて、行儀よく座つてゐた梅奴は小三の注意で舞扇を把つて立ち上つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

照子の注文で梅奴は老松の『松の太夫の裲襠は……』といふ三下りのところと、梅の春の『初買によい初夢をみつ布團』といふところ迄を踊つた。

梅奴の踊はまだ手振りも足拍子も大分あぶなつかしいものではあつたが、照子は、靜かな春の夜にふさはしい其派手な薄色の長い袖と金扇とが縺れ合つて灯影にヒラリ〳〵ひらめくのが、うれしかつた。

照子は、もつと踊を見てゐたいと思つたが、平素から、藝にはり込まぬ土地の藝者達の事情をよく知つてゐるので、梅奴に恥を掻かせては氣の毒だと思つた。

短かい沈默がつゞくと漸次暗い寂しい考へに落ち込んでゆかうとするので、照子は慌てゝ氣分を明るく、かき立てやうと焦燥つた。そして考へる暇もなく『姐さん何かひとつ』と云つて唄三味線としては少し棹の太すぎる小三の三味線を指ざした。小三の面にに烏渡不安らしい陰影が閃めいたやうであたつが——無闇に藝に好みを云ふ女客は藝者達にとつては迷惑なものであるので——それでも、三味線を採り上げて爪彈きでサッサと吾妻八景を唄ひ出した。澁い濁りのない、可成綺麗な聲ではあるが、調子にはりがなくて拍子も處々だらけ氣味であつた。

梅奴は年に似合はず酒が強くて、いつも、客の前で其豪酒を誇りにしてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

灯影の搖れる赫い顏を崩して、わけもなく歡んでゐる男達の間に座つた梅奴は兩手に亨けた盃を、砂地が水を吸ひ込むやうにして、つぎつぎと呑み干していつた。

兩手の指先で器用に、うけた盃を鳥渡輕い身振をしながら、さし出す梅奴の恣態は踊の型にはまつた、あざやかな形であつた。やつぱり藝者には美しい處があると照子は思つた。幸三さんは調子つぱずれの赤い聲で間の延びた都々逸を唄つた。龍雄は××大學にゐた頃神樂坂邊でおぼえた常盤津だの清元だのを一本調子ではあるが鳥渡胡魔化せる其喉でどうにか纏まつたものにして聞かせた。

照子は又淋しくなつて來た。是が歡樂の巻であらうか。歡樂とは飽迄も明るい華やかなものであると思つたのに、這麼寂しい影が伴つてゐるのであらうか。今更に漂ふてをる空氣のどこに自分が憬憧れてゐたやうな歡樂の色や香の閃めきがあるであらうか。嗜什して自分ばかりが斯うつまらないのであらう。

そう思ふと幸三さんや龍雄などがわけもなく唯もううれし相に唄つたり飲むだりしてゐるのが羨ましかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

照子は紅くほてつた頬に冷い片袖を推しあてながら、椽の障子を一枚忘らして起ち上つた。欄干の下には川の流れが快い響を立てゝ、寒さうに星の瞬く、晴れた空の所どころに、白い雲が飛んでゐた。

月が恰度雲を破つて、山つゞきに海へ延び出てゐる岬の上へ走り出た。丸い影が波の上へ浮ぶと、見るまに一面に美しい銀鱗を渚へ漂はした。

幸三さんに別れて家に這入ると、照子はがつかりしたやうに、上框にペタリと腰を下した。アアと伯母さんが長く欠伸をひく拍子に、掛時計が懈るさうに二時を打ち出した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

最近の感想二つ　野枝

――與謝野晶子氏の「鏡心燈語」について――

「太陽」三月號の「婦人界評論」に與謝野晶子氏が婦人の選擧運動についての意見を述べあはせてそれを批難した女流教育家にあたつてゐられるのを讀んだ。

聰明な氏の議論は如何にも自然に進められてある。一通りな理の當然なことが並べてある。然しあの論文にどれ丈けのたしかな背景があるか？　どれ程の深味をもつてゐるか？　如何にも薄ぺらな理屈であることが私にはあきたらなく思はれる。恐らく――私があれを讀んで解つたことは――自分の行爲を無條件に批難されたと云ふ憤りから氏はあれを書かれたに相違ない。

氏はもの〱しく婦人の選擧運動――多くの人もまたさう云つてゐる。――と云つてゐられるがそれが果して氏が仰云る程價値のある仕事であらうか、たか〱有權者の戸別訪問位のことが何程のことであらう、私は戸別訪問と云ふことの價値を殆んど認め得ないでゐる。四五の婦人達が戸別訪問をするやうになつたからと云つて日本婦人の生活意志の轉

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

化の表現であるなどゝは笑ふべき自己辯明である。

彼女等に果してどれ程の自覺があつて運動をしてゐるか？　何が動機でそれが俄かに増したか？　私は出來る丈け無遠慮に云ひたい。彼女等はたゞ夫の名譽心や野心の手傳ひをしてゐるに過ぎないではないか某夫人の如きは訪問をしなければ離縁するなどゝ强制的にやらされてゐると云ふ話ではないか。哀願するには女に限ると云ふ唯一の理由からむしろ利用されてゐるではないか、「××さんはとにかく奥さんが氣の毒たから投票する。」などゝ云ふことが婦人を使用する動機になつてゐる。彼女等は有權者の家に行つて頭を低く腰を折つてさて何をするか？　徹頭徹尾哀願的態度をもつてたゞ一票を貰ふのではないか。

彼女等は私の見る處ではまさしくより多くの同情と、よりたやすく一票を得られると云ふ理由から體よく使用されてゐる。手段に使はれてゐる。それが今年になつて急に增したと云ふことは前にその手段の効果がよかつた爲めに他ならぬ。決して婦人の生活意志云々などゝ稱すべきたちのものではない。自覺ある婦人が戶別訪問などどうして爲し得やう。不服を云へばもう根本から違つてゐる。代議政體と云ふことすらもはや問題にもならないがそれを先づそれとしても例へば夫が候補にたつたとしても思想にも政見にも何の理解も同情もない人達の許へ迄一々頭を下げてたのまなくては仕方がないやうな貧弱な背景しか持

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たないと云ふことは堪えられない屈辱ではないか。それ程貧弱な地盤に依つてでなくては立てないやうならむしろ可能性がないものと見なければならぬ。可能性のないものを無理矢理に他人に手とりあしとりして貰ふことをたのみあるくとは何たる情ないことであらう。これは如何にしても自覺ある婦人のなし得ないことではあるまいか。

併し私は又一方に私の云ふのとは別の意味で氏等の行動を批難した女流教育家の愚劣さを笑はずにはゐられない。「彼女等が女は外で働くものではない」と云ふやうな偏見から氏等の行爲を批難したのについては私は氏と殆んど同感である。「外で働く」と云ふことがあまりに形式的に用ゐられてゐるのにむしろ私は驚かされる戶別訪問はたゞおもて立つて出て歩くと云ふこと丈けが如何にも外の仕事らしく思はれるけれど實は家の中の仕事と何處に區別があらう。所謂彼女等の戶別訪問は內助と云ふ常套的な言葉の內容から一歩も出てはゐないと云ふことを聰明な女流敎育家達がお氣づかれなかつたことをふしぎに思ふ。そしてあはせて晶子夫人の辯明がまるで見當違ひであることもあはせてふしぎに思ふ。

序でに晶子夫人は憤りをもつて女流敎育家に向つて種々なことを迫つてゐられる。然し

要するに花の日會の主唱者であつた婦人たちが婦人の選擧運動を批難したことについて花の日會と選擧運動にどれ程の差があるかと云ふことを論じてその矛盾を笑つたのだ。しかしながら世の教育家たちの無智と鐵面皮とは今更何と云つた處で所詮とりかへしはつかない。私も矢張り前にはそれ等の人々について抑へることの出來ない憤り感じてゐた。併し考て見れば俗衆が相倚つて形造つた社會の基調は常に俗衆に理解の出來ない以上のものでは決してない。日本の女子教育が寺子屋時代からいくらも進んでゐないと云ふのは俗衆の形造つてゐる社會の根底をなしてゐる思想の基調が少しも進んでゐないと云ふ證據である。もし教育と云ふものがあくまで社會的にしか存在しないものであるならばいくら我々が聲をからした處でそれはむだである。そして不幸なことには今の教育の第一の形式である學校はどうしても社會的にしか存在しない。そしてこれも社會が持つてゐるとおなじ因習、道德、及び權威しか持つてゐない。私立と稱する學校に於いてすらさうである。そしてその教師達はどうか？　彼等はたゞ只管に校則をまもり支配者の氣に入らんことをつとめる爲に出來る丈け形式のまゝにすべてを生徒の上に行はうとしてゐる。それを見て滿足氣に微笑む者は誰か？　かうして彼等は社會の底を流るゝ基調に最も共鳴を感ずべく最も適當なる人たるべく教へられてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

併し私共はとてもそれで安神するなどゝは以ての外である。私達の純潔な後繼者達が持つてゐるすんだきれいな何物にも汚されない彼自身の調子を尤も不自然に汚く濁されること云ふことは實に堪えられない苦痛であらねばならぬ。と云つてそれを敎育家や世間に大聲でどなつて見た處で矢張り何の手答へのありやう筈がない。私達はそんな無駄な努力をすることよりも如何にすれば彼等の自然性をより少く犯されよりよく保てるかと云ふ研究を私達――即ち子供の親たる位置にあるもの――はしなければならぬ。私は考へる。社會の基調となつてゐる程の大きなものを少數の者が急にさう容易に動かせる筈のもので はない。私達は如何にすれば彼等に煩はされずに進んでゆくことが出來るかと云ふことを心掛けるより他に仕方はない。人間の本然の性格は併しさう深く不自然に堪えらるゝものではない。私も以前は多くの小さい人たちが無智な敎育家の爲めにあやまらるゝことをあやぶんだりはがゆがつたりした。けれど私は今は彼等に人をさう大して敎化することの出來ないことを知つてゐる。自然性をきづつけられずに多くもつた人達は如何に壓迫が來やうとも矢張り彼等はその本性から片時もはなれてはゐない。強い個性をもつた子供は貧弱な敎師の壓迫位に凹みはしない。眞の敎育が形式一天張りの學校や敎師に出來やう筈がない。また彼等にまかして安神してゐやうとするのが間違ひだ。彼等の愚劣さを今更繰り返した處

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でそれが何にならう。彼等が子供を如何に尊き未成品であるかと云ふ尊敬を子供に持つことが出來ない間は到底駄目だ。何の方面に向つても意久地はない。彼等がいゝ加減にもてあつかつてゐる子供達の中から不遜な教師に自然に反省しなくてはならなくなる程に正しい反逆者が出なくては彼等は本當に自覺することは出來ないであらう。

與謝野氏は多く自己辯明から這入つて頑冥な教育家を呪はれた。彼等の拙劣さは呪ひに價するけれどそれは今私達を取りまいてゐる社會の基調をなしてゐるものと離れがたき密接なものを持つてゐる。それはちよつとでは私たちがどうすることも出來ない程の量を持つてゐる。故に再び私は繰り返して云ふ。この醜惡な社會に煩はされずに自分を育て自分の周圍をつくるには如何にすべきかと云ふことが私達のたつた一つの問題である。私は思ふ。晶子夫人は私よりも豊富な生活の經驗もありすべてにもつと聰明な輝きを見せてゐる方だ。そして今私の云つたことなどは當然氏としては考へてゐられなくてはならぬことである。――何の方面から考へて見ても――それだのに何時もに似合はずこんな論文をかかれたことを氏の爲めに私は惜しむ。私は氏の戸別訪問についてもう少ししつかりした意識がおつてやつてゐられることゝばかり思つてゐたがあれでは全く失望させられた。

要するに氏は自分の行爲についてしつかりした捉へ處をもつてゐられなかつたのが氏の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

爲めに一番惜しいことであつた。氏がもつとしつかりした識見を自身に持つてゐられたならば吃度愚劣な教育家等のとるにも足らぬ言葉のはしなどをとらへてあんなことを云はれはしなかつたらうと私は思ふ。

――生田花世氏に――

生田さん、私はあなたにお話したいことを澤山もつてゐました。それで何時かも書博堂で是非ゐらつしやいと申しあげたのでした。その後ゐらつしやるか／＼と思つて待つてゐましたけれどとう／＼お出がないのであなたの「懺悔の心より」の校正をしながらこの手紙をかくことに極めたのでした。併し此處では私はあまり多く云ひたくありませんからあなたに手紙をかゝうと思ひついた時に考へたこと丈けにして置きます。あとはお會ひしてからにしませう。

「懺悔の心より」を私が讀んで一番苦しく思つたことはあなたが如何にも苦悶してゐらつしやるらしいことです。それは主もにあなたがお姑様に對してのそれです。一つは自分に經驗があるからかもしれませんけれど如何にも苦しさうなあなたの樣子をおもつては私は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

默つてゐられない氣がしますからこの手紙を書く氣になりました。然しこの手紙がどれ程あなたの苦しみを感ずる價値のあるものかは自分にもわかりません。けれどまあ辛抱してきいて下さい。まるで何にもならぬこともないとおもひますから。

「夫を愛する愛が姑を抱擁する程夫に對する愛が豐潤ならば――」と云ふのはあなたも仰云る通り理想家の云ふことです。それは考へることの出來る理屈です。併し實際にぶつかつた者がどうしても云ひ得ないかなしい矛盾を含んだ理屈です。それはあまりに多くありふれた事實を無視した言葉である。これはあなたにとつてはあきらかにぶつかられた事實である丈仰云ることが本當です。しかし私の考へる處ではあなたはあまりにそのことにばかり拘泥しすぎてゐらつしやりはしないかと云ふことです。あんまり考へすぎて却ていけないのではないかと思ひます。性格によるのかもしれませんが私は毎日姑の顔を見てゐても自分の關係のことなど考へたことはありません。私は何時でも自然に〳〵と心掛けます。併しもう心掛けやうとするのが不純な心持をかもす第一歩です。無頓着であると云ふことが一番いゝのです。けれど此處まで書いて私は考へます。私は元來あまり細心な方ではないから無頓着と云ふことが苦しくありませんけれどもあなたのやうなデリケートな方にはそれは大變な骨折りであるかもしれません。さうすればもうその價値は消えてしまひます

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ね、少しでも努力する意志があれば——殊に自分の不快なものに向つての——もうそれがすなほに向ふに通じないことになりはしないかと思ひます。けれどさう云つてしまへば話すことなんかなくなりますからまあ話して見ませうね。私は第一に誰でもが苦勞をするのはあの人はよく行き屆くとか氣がつくとか、または親切だとか本當にいゝ人だとか思つて貰はうとする意志をのぞくことを心がけることです。何處から何處までいゝ人に見て貰はうと云ふやうな大それた欲望をおこすのは苦悶の種をまくやうなものだと私はおもつてゐます。自分のいゝとこ、また惡いとこはかまはずさらけ出してしまふことです。私はこれ丈けの缺點とこれ丈けの長所をもつてゐますと云ふことを誰にも見せておくのです。體裁よくとりつくろはうとすることは苦しみをますやうなものです。私は世間のすべてありとあらゆるこんぐらがりは醜いものの價値をば誰もが認めまいとし覆はふとしてゐるからだと信じてゐます。一つは習慣の恐ろしい力で物そのまゝの價値を見ることを多くの人が知らないからだと思ひます。實質よりも技巧を貴ふと云ふ惡い習慣がまづ矯められなければなりません。併し世の中の多くの人を相手にしてゆかうとすれば勢ひそれ等の人に制せられます。制せられる丈け自分の本當の意志がまげられることになつてつまりもう其處に不自然な點が出來て來ます。處で私は幸ひに最初から彼等の前に自分をさらけ出してかなり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自然な道を歩かねばならないやうに餘儀なくさせられました。これは私の一生を通じて感謝すべき點だと思つてゐます。それですら始終不純な感情に惱まされてゐます。惡くおもはれたくないと云ふ欲望は何時でも私の頭のすみで目を光らして居ります。それが他人と對する時に何時でも出て來ます。殊に姑や小姑に對する時にはこれは一番出たがるものですが一番禁物です。その辛抱が出來なければとても苦まずには暮せません。あなたも仰云るやうにまるで見もしらぬ何の交渉もない人と突然仲よく暮さねばならぬと云ふことは何う考へても不自然に違ひありません。殊に家族制度、生活の形式等がその點はよほど無視してつくられてゐますのでどうしてもいくらかの苦痛は忍ばねばならなくなつてゐます。だから別居と云ふことは最善の手段ですがそれが出來ない時にはどうしても仕方はないのです。其處であなたが姑に接近しないやうに無交渉な生活をつくらうとしたと云つてゐらつしやるのは一應もつともに聞こえますが あなたは それを形式的に お現はしになつたらしい。無交渉はどの點からも無交渉ですから別につとめる處はありません。あなたの內生活と向ふの內生活とを切りはなしてしまふことならわかつてゐますがそれを具體的に表はすのはよくないと思ひます。あなたはそれにきつと姑樣のなさることや考へなさることについていろんな心配をなさるのでせう。私はそれを云ふのです。それをほつておいて勝手にさ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

せ勝手に考へさせるのです。もしそれがこちらに及ばしさうになつたら知らん顔してゐるのです。その代りこちらでも出來る丈け自由に振舞つたらいゝぢやありませんか。私はさうしてゐます。姑のしたいこと云ひたいこと聞きたいこと何でもさしておきます云はしておきます、聞かします。その代り私も勝手にしたいことをし、云ひたいことを云ひます。そうして何を云つて來やうと理解のない言葉に耳を傾けもしませんし、煩はされもしません。時々は忌々しいことも腹立たしいこともまた口惜しいこともないではありませんがまあ先方ではその人相應の理解しかないのだからと思へば何でもありません。その通りに向ふでもきつと不快なことが澤山あるに違ひありませんけれど兩方で自分の勝手な氣に入つたことを邪魔されずにしてゐますから直ぐ不快なこと等は消えてしまひます。萎縮することはよくないと思ひます。出來る丈け自由に動くことが一番いゝことだと私は思ひます。あなたは愛しやうとしてゐらつしやるらしいがそれはます／＼あなたの苦悶を增すのみだと思ひます。あはれみはとしよりにとつては一番感じなくてはならないことです。そのあはれみであなたの老婦人を自由にさしておやりなさいましあはれみの心さへあれば大抵はがまんがなります。愛しやうとするのはいゝことかもしれませんが恐らくあなたは失望なさらなくてはなるまいと私は思ひます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

姑だと始終あなたがおもつてゐらつしやることはよくありません。夫の母だとか義理とか何とか考へると壓迫を感じます。普通の同居人と思つて御覽なさい何でもありません。うちとけて自由にしてゐられると思ひます。

いろいろな場合にしかし何時でも苦しまなければなりません。私はその苦痛は夫に對する又は夫から受くる愛によつて償はれなければならないと思ひます。常に愛をもつてゐ、或は感じてゐれば大抵は我慢の出來るものです。併し夫と自分との愛情についての干渉らばそれはどうしても同居をしてゐることは出來ない。他に如何なる自由があらうともこれ丈けは彼等にいゝ加減なことをさるべき質のものではないと思ひます。けれどその他のさゝいなことはさう一々氣にかけずに片づけてゆきさへすればいゝのだと思ひます。苦痛を恐れてはならないと思ひます。その中にとび込めば左程のこともないのです。だん〳〵に何でもなくなつてゆきます。殊にこの苦痛の償ひとなるべきものを何時も身近く持つてゐることを意識してゐることが出來さへすれば大抵のことは許してゆけるものだとおもひます。隨分下らない、まとまりもしないものを自分ひとりの興にのつて書いてしまひましたわねおわかりにならないかもしれませんがこの位で止めておきます。此度ゐらつしやい。他にもお話したいことがありますから。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

折りにふれて

岡田ゆき

私は昨夜こんな夢を見た。

晴れ渡つた紺青の空は、靜かに眠つて居る樣で、やはらかい感じのする太陽は兩側の町並に、白壁の土藏にふうはう光りを投げかけて居る。

自分の眼前に展開された、場面は、私が好んで、よく見る豐國や廣重の繪の樣であつた。其の長閑な景色に、浮世繪か、草双紙からでもぬけ出したかと思はれる樣な江戸時代の美しい人達が、長い帶を見る樣に、ひつきりなしに、しやなり〳〵と歩いて居る。店頭の暖簾（のれん）の紺の香が私の鼻をつく。

始終私の耳に聞きあきた電車の重い響も、寬物のうなりの樣な汽車の音も聞えない。都會の空に充滿して居る煤煙もない。私はふつと、遠い過去に赴つた世の中に、生れたのぢやないかしらと思つた。

其の、のんびりした心持ちは、夢が覺めて後も忘れられないものであつた。

京都の兄から、今朝床の中に居る内に、小包が届いた。私は横になつたまゝで、其の小包をほどいた。夜具のぬくもりが消えない、私の手の下をくゞつて、ハラリと肩あてに落ちたものがあつた。私はすつかり、ほどき終つてそれを一目見た時私の心はうれしさにおどつた。私が兄に賴んで送つて貰つた、紙の間に入つて居たのは、とうてい私が今迄に、見る事の出來なかつた、色やデッサンのエンヴエロップであつた。

それは兄の友のK氏とM氏との合作なのださうである。南洋の香がする樣な椰子の木に、熟した實が左右になつてゐるデッサンもあつた。クラシックな格好の小鹿と若草のもあつた。この鹿の形はまるで古い、墓から埴輪と一所に堀り出したかと思はれるものであつた。殊に太陽が輝いて居る細い道を二人の女が家から出て歩いて來る所は、私は只單に、エンヴエロップの繪として、見てしまふ事は出來なかつた。私は、太陽を眞理として眞理に浴して、只一直線に進む女達は、まさに自覺した女性であると考へられたのである。幼い子供が自分の好きな玩物を與へられた時、逢ふ人毎に、それを見せて歩く樣に、私はひとりぼつちで、默つてよろこんで居る事が出來なくなつたので、床を出るさすぐに、其のエンヴエロップにたいする感想を書いて京都のK氏に送つた。

私は只切りにうれしい。

今年もはや、一ヶ月は過ぎ去つてしまつた。病氣はいつもまとまつた事をしやうとして、いきごんでゐる自分

を挫く。自分にとつて、病氣は敵である。然しこれつばかりの敵に、負けてはならない。必ず打ち勝たねばならないのである。私の行かふと心がけて居る道程は、匂ひ高い美しい花が散り敷いてある、光り輝いた所である、成功ともなづくべき、其の花を拾ふには、必ず苦痛があるに違ひない。けれど、自分は考へる。それに伴ふ苦痛ならば、自分はむしろ喜んで受ける心算である。かへつてその苦痛は普通一般の女と異つた、道を自分のみは、進んで居る證據となるからである。

只自己をたよつて、行かねばならない。努力は無定限である。人間は生のあるかぎり努力が、必要である。

寒さは、随分さびしいけれど、裏の冬至梅(とうじばい)がちらり、ほらり咲き初めた。幼さかつた昔、裏の梅が咲初めると、祖父に連れられて、臥龍梅へ行つた事を覺えて居る。毎年それが年中行事の一つであるやうに、必ず出かけたものであつた。両國のステーションから汽車に乘つて、龜井戸で下りて、天神様の境内をぬけて行つたのである。あの太鼓橋を渡つた、(と云ふよりむしろ登つた。)のを、かすかに記憶して居る。なかなか高くて、登る時一種何んとも云へない、輕い不安に恐怖を加味した心持ちを抱いたものだ。此の心持ちは時々今でも夢に見る事がある。

其の頃は未だ、祖父もそれ程老ひては居なかつた。

私は、梅の花が咲く頃になると、長い事しまつて置いた、押花の様に、くちや〳〵に皺よつた、祖父の顔を眺めては、遠い過去の淡い記憶を思ひ出すのである。

今日、京都のK氏から最初のお手紙と、エッチングを三枚受け取つた。私の想像より以上に、自分を理解して居られるのが、うれしかつたのである。

K氏も私も進む道は同一だと考へる。繪畫にしろ、文學にしろ、總て、藝術なトルースを握つて居なければ駄目である。いかなる大家の作品でも、作つた人と、作品との間に、つながつた、あるものがなかつたなら、つまらないものに相違ない。私が此所に云ふ、あるものとは、繪畫なり、文學に、表現された力を云ふのである。

私は此の力を、K氏のエッチングに感じたのである。殊に三枚の内、一番小さなのに、力を認めたのである。K氏にとつて、これは祝すべき事であると同時に、ます〳〵努力されることを私は望むのである。

私はもうかなり前から、行つて見たいと思つて居た、神田のI書店へ、今日山田先生へお稽古に上つた歸りに行つた。Iさんにも初めて逢つた。眞面目な、落ついた態度の人で、目に底力がある様に思はれた。Iさんから

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

受けた最初の印象は、極めて眞摯なものであつた。
Iさんの書齋で私は澤山の繪を見せて戴いた。ミレーのもあつた。ホイスラーのもあつた。ミレーの靜寂な繪の中に、只一枚、「嵐」といふ非常にすさまじい感じのするのがあつた。人間の性格でもさうだ。非常にはげしい人の一面には、必ず靜寂な一面があるのは事實である。と同様にミレーの繪の一面を見たのである。其他好い彫刻の寫眞を幾枚も拜見した。私の心はいつになく興奮した。

Iさんの書齋のお床の間には、夏目先生のお書きになつた幅がかけてあつた。其の墨繪は、萩の花に滿月がさして、自在に鍋がかけてあつて、「萩の粥月待つ庵となりにけり。」と云ふ句か書いてあつた様に覺えて居る。
例の先生獨特な面白いものであつた。先生の繪には誰れも模倣する事の出來ない筆力がある。やはりそれが偉大なる、先生の人格のひらめきかと思はれる。
私はI書店に行つて好かつた。

昨日、半日を市村座見物に費した私は、かなり疲れた思ひで、今朝目かさめた。友禪染の様な、華美な、芝居の空氣が、未だ私の體からぬけない様な感じがする。
野上さん御夫婦と、岩本様、岩波さんは、花道の側の桝にいらしたが、私は母のうづらから、お仲間入りに行つた。
狂言は、「河内山」、中幕か「妹脊山」大切りが所作であつた。
芙雀の三千歳は美しい澄んだ目を持つて居た。殊にやはらかい丸味をもつた廓言葉は私の耳に快く響いた。女の様な乳房もなく、優しい女心もないのに、どうしてあんなに女形（おやま）は美しいのかしらと思つた。吉右衛門の河内山は、おしだしも立派で重味かあつて好かつた。
「妹脊山」でお三輪（菊五郎）がおだまきを、右手に持ち、
「これ、このおだまきが、切れくさつたばかりに、大事な男御（とのご）を見失つた。」
と云つて、求女（勘彌）の後を追ふて、花道から走り出たのは、美しく、いぢらしかつた。色白な豐かな顔に、しぼりの帶がよく、似合ふて、若さが充ちた様子に、優艶な聲が私の心をそゝつた。忘れらない思ひ出として、永く昨日の事が心に殘るであらう。

今夜、ピアノのお稽古を終つてから、從妹の初節句に、母から送るお雛様を、三田通りの人形（にんぎやう）に買ひに行く。母と二人きりで買物に行くなんて、私にとつて、眞實にめづらしい事である。
電燈に輝いて、きちんと座つた、内裏様、奥様、五人

囃子に、官女さては種々のお人形さん迄、ひきしまつた心持ちで、行儀よく並んで居る樣に見える。母がお雛樣を撰擇して居る間私は美しい小さな蒔繪のお道具が飾つてあるガラス戸の前に腰かけながら、ふつとこんな事を思つた。

あの今、店の奥へ何か、取りに立つた、此家のおかみさんや、まへかけの下へ手を入れて、まぢ〳〵私達を眺めてゐる小僧さんや、其他皆、寢沈まつてしまつた、眞夜中頃、此の店中の小さな人達の胸に、魂が入り、お囃子の音面白く、官女は燃えたつ樣な緋の袴姿で、眞紅の椿の花の樣に、踊り始めると、其他のお人形も、手拍子、足拍子面白く、踊り狂ふて、樂しい一夜を過し、東の空が紅く染つて、店の戸の隙間から、白つぽい色が忍んで來ると皆一樣に、もとにかへり、何知らぬ顔をして、座つて居るのではないかしら、と。物語りめいた事を考へる、自分がおかしくなつてしまつた。

母は私にも小さなお人形さんを買つて呉れた。可愛らしい小さな目は「大きな、なりをして、未だお人形なんか、買つて、貰ふの。」と云ふ樣に思はれた。赤い着物の小さなものを、胸に抱いて、通りを歸つて來た時、私の小供らしさを、町の柳は、嘲笑ひして居る樣な感じがした。

ピエール、ロチの「日本の秋」を讀む。永い間、眠つて居た、日本が、目覺めて、間もなくの頃で、今日では、日本人でさへ、江戸の夢を、倒底完全に想像する事も不可能なのに、フランス人のピエールが私達の目前に、其時代を、展開して呉れるのは、ほんとうに、感謝すべき事ではあるまいか。

私は、それに乘ると必ず、おびやかされた樣に、泣き出した程幼さかつた昔であつて、乘り心地さへ、淡い記憶に殘つて居ない、鉄道馬車を新たに、覺えさしたのは、ピエールである。殊に面白かつたのは、人力車夫の車を、黑裝束の惡魔の子と、云つて居る事で、人力に乘つて京都の町を行く所が、大變輕い感じを現してあつた。

私は、輕く、よくクル〳〵廻る彼の才筆に、魅せられてしまつた。その頃でも、ピエールは、日本娘と、話した印象を、澤山持つて居る。私はピエールと話した日本娘の一人として、存在したかつた。私はよりよい話題と、内容とをもつて、此巴里子と話す事が出來たであらうに。

時は、ピエールと私を、遠く離してしまつた、けれど、事實は、よく、彼を、解する事が出來る。せめてそれを自分の幸福と考へやう。遲く目覺めてあはてゝ、四邊を、見まはし、動き出した日本に、彼は好奇の目をみはり、一方に江戸の夢に憧憬を持つてゐるのが、うれしい思ひがした。（終り）

——大正四、三、四——

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

淋しき心

山の井　みね子

目の前に控へてゐる年末度と云ふことが大勢の人達の心持ちをいらいらさせた。此の一週間ばかり四時五時頃までいそいそと働いて誰も口もきかない。

大風が吹いて寒い。北口の戸はみんなしめきつてゐる。一寸出あるくにもまるくなつて足音をひかへめにとび歩るく程。やわらかい太陽が輝いてゐるのにそれさへも冷たくさゝる様だ。硝子越しに見る田の面はもうすつかり消えて枯野は餘程黄ばんで來た。

光子が最後の時間を終へて來た時は三四人の人達がストーブのまりに陽氣に話し合つてゐた。

「足が冷めたくて足がつめたくて。とてもひどい風ですね。」

光子は獨言の樣に云ふてストーブに抱きつきたい程に足をあちらへまはしてあたつてゐた。

「光子さんが來たからおらの話はやめにし樣よ。」

どうしてですつて？

と聞き返した時

「女の人は自分勝手なものですからね。」

と耳をする樣な小さな聲がした。

「えゝ、そうですよ。そうですよ。私ほんとに自分勝手ですわ。」

「そんなこと仕方のないことですわ。」とそんなことにも光子は心をいらいらさせた。ストーブに澤山石炭が投げ入れられた。

「何となしにおちつきませんね。もうすつかりおしまいになりましたの？　私まだなんですよ。忙がしいものねすつかりつかれてしまいますね。肩がはつて。肩がはつて。」

「いゝお天氣ですね。春になるんですよ。」

光子は何もかも快く笑もし愉快さふに語りもした。

ぎしぎしと北口の戸が明いた。青い顔の澄子がはいつて來た。「何故自分はこゝにゐたのだろう。」と思ふ程其の瞬間の光子はあはてた。おそれもした。

「相變らずだめ。私はやつぱり獨でゐ樣。私は淋しくもいゝんだ。今度こそ――、私は澄子さんと離れてしまふのだろふ。どうするもんだ。いゝ。いゝ。私は行けるところまで。」

光子はさりとめのない思いに迷ふた。

光子の室は南の棟の西の端にあつた。北の棟の中程に昇降口があるので光子はどうしても澄子の室の前を通ふられば自分の室へ行かれなかつた。光子は澄子に見付からない樣にといつも小走して澄子の室の前をすぎた。

澄子は椅子を運んで自分の机によつて調べ物をしてゐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ろ。光子は直に自分の後に澄子の座はつてゐるのを思ふとくすぐつたくてたまらない樣な氣持ちで立ち去る事もならずぢつとして身動きもしない。澄子が一言でも云ふのを耳をすまして注意した。

「何て私は意地張りだろふ。私には到底淋しくてたまらない日の來るまで澄子さんに降ることは出來はしないわ。あの人に私はたよつてゐるのだらふか？　私は何をあの人に要求してゐるのだらふ　あの人はどれ丈け眞實に私のことを考へて下さるだろふ。あの人は私を憎んでゐるじやないか。何故私はあの人を全く去ることが出來ないのだろふ。私が私の主觀をあの人に要求するのは無理なことぢやないか。私はやつぱり獨の人間ぢやないか。」

「Aさんのお婚禮の時おしようばんに座つたYさん。あの方はきれいな方でしたつてね。あの人ぎり特別にきれいてはきだめに玉がおちた樣なものでしたつて。」

澄子の聲に光子はぎよつとして一言一言きゝすてはしなかつた。

「何故澄子さんは私の前であんなに平氣で話られるのだろふ。私だつてあの人の前でおしやべりがどうして出來るだろふ。」

「そうぢやないんだ。私があの澄子さんの聲をきくのさへ恐れてゐる樣に澄子さんも私と云ふものゝあるのを知るまいとしてゐられるだろふ。」

何か二人をつないでくれるものはないかと光子は事件のおこるのをまつ樣な心持ちて澄子のことを考へた。

「澄子さんは私と話したがつていらつしやるんだろふか？　もしそふだとしたら――。そふ。そんなことはないだろふ。何時か？　何時か？　そんなことはとてもない。」

光子は澄子の宿のおばさんのなくなられた當時の事をはつきり思ひ浮べて其の頃の澄子の態度を肯定する事は出來なかつた。

「あの時。澄子さんは私をあんなにさけたがつていられたぢやないか。私の宿へ用事があつてよられた時。澄子さんは私の後へついて來られて。そうだ。私はあの時幾度澄子さんに話しかけ樣としたろふ？　何と言はふ。とどの位考へたか知れなかつたのにけどんな澄子さんの態度はつい私を遠ざけてしまつたぢやないか、勿論澄子さんは獨でゐられたかつたにちがいない。そして私をうるさいと思はれたにちがいない。其の時だつて私は淋しくつてたまらない時だつたもの。すつかり追ひはらはれてしまつた樣な氣もちしてKさんとお別の挨拶もしないでかくれる樣にわかれた。そして私はどんなにあの時澄子さんに侮辱されてゐるのだかと思いわずらつたじやないか。」

と繰返し光子は思ふて、「やつぱり私は獨なのかも知れ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ない。」と獨言つた。

「家かへろふ。」とやけ氣味に椅子を離れたけれども光子は「澄子の歸らないうちは。」と思いわずらつた。もし澄子さんが私の宅へよられたらと心がゝりでかへる元氣はなかつた。それとなく澄子の樣子を窺つては「澄子さんは用事がない筈ぢやないか何故今日ばかりあんなにはるかゐられるのだろふ。」とそんな事まで思ふたりした。大方の事務がかたづいて廣い建物の中はがらんとして靜になつた。二三人の子供が毬投げをしてゐた。光子は自分の室まで行つて机のひき出を整頓したりカーテンをなほりしたり一通りかたづいた室をあちこちと見まはつて歩いてかへつて來た時澄子はもう歸宅したらしかつた。光子はほつとして包を抱へた。

「澄子さんはどんな心持ちでかへられただらふ。何故二人はこ小つきつきになるのだろふ。二人が打ちとけたのはつい此頃だつたのに。」と思ふて光子は急に淋しくなり出した。

「やつぱりあの時私等は眞に打ちとけやしなかつたのだわ。」

白い机の上が亂雜になつてゐた光子はそこまで行つて本をなほしたりお茶わんをよせ集めたりしてふと新らしい雜誌が來たのに氣がついた。誰もゐない室にそつとわろいことでもした樣に光子は大急ぎに包をさいて雜誌をしまいこんでのがれる樣に裏口にまわつて下駄をはいた。寒い風が遠慮もなく吹いて來る。ぬかり道を一足ぬきにあるいてやつと本通りの廣い道に出た。青い空がつゞいて南の空が輝いてゐる。「今日はよく遠くの山が見えるなあ。あんなに雪の山が光つて。」うれうれとつゞく白い道を見ながら光子はやつぱり澄子のことを考へた。

もう一度足を止めて南の空を見た、その瞬間に光子は遠い町にわかにて住む戀人のことが思ひ出した。が輝いた瞳にはいつか涙が浮ぶのであつた。風が吹きつけるので家の影にかくれた。軒ぞひに光子は家にかへつた。西むきの椽に一ぱい夕陽が輝いて宿のぶち猫がうだつた樣に四本の足を投げ出して眠つてゐた。光子の足音にねむげな眼を見上げた。本を取り出して猫をじやらして見樣として光子はれそな猫の足のそばまで下げた。一寸ゞ足を二三度動かして猫は眼をふさいでしまつた。あんなに狂ふて飛び歩いた癖に。と光子は輕いねたみを覺えた。そのまゝとんとん二階にのぼつた。光子は包みをなげほかして座はつて見たが澄子のことが氣になつた。「雜誌を出して「女友達」をよんで見た。澄子さんがおかきなすつたのだ。と光子はところどころもう一度繰りかへした。

「やつぱり澄子さんが――。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「×町でBと云ふ易者がきて それはなか〳〵よくあたると云ふ評判ですよ。」

「私も見てもらはふか。ね。 私の將來でも。」 なんて笑談をした事を光子は眞劍に考へて見てゐた。

「私ほんとに見て貰はふか。 よそふよ。 もし縁喜の惡い事でも出れば困るもの。 それでもよくあたると云ふが。」

光子は到底わすれられない「Kさん」の事を今の瞬間思ひつゞけた。

「なに。 それよりも今度の日曜まで待たふそして歸宅して、――それから――姉にたのんで―― あゝそうし樣。そしてKさんにあはして貰はふ。」

やつと思ひまとめた樣に。 「これが私の最後の方法だろふ。 これ以外にどうも出來ない。」

光子はとりとめない過去幾日かの生活を思ひ浮べながら。 「これだつてどうなるものかわからないたよりないものかも知れない。」

こふして思ひあぐんだ末は いつも澄子さんの事を考へてゐた。 ひよつとすると私と澄子さん二人はこのまゝに永く遠く別れてしまふのかも知れない。 そんな事を幾度も口に云ふて見た。 そして光子は二人して仲よくなつたあの頃の日記を出して見る氣になつた。 日記の頁を繰りかへして

「たつた一月しかたゝない。 私等は幾日仲よく續いたろふ。」 と指を折つたりした。 しめきつた戶のすきから夕陽がさし込んでゐる。 柿の葉が風に吹かれてさら〳〵となつてゐる。 こたつによりかゝつて。

「春になつてからは柿の葉のさら〳〵となるのもいやに思はないね。」

△町に行く途中澄子と語つたことなんか 思ひ出したりした。 宿のおばさんが機をおつてゐられる。 何故私ぎりこういら〳〵してゐるだろふ。 光子は日記帳をよみ初めた。

使に持たせてやつたKさんへの手紙

「今日は私の紀念日です………… 今日一日だけやさしくあつて下さい。」―― 「女友達の中にあつたあの手紙。 やつぱり私の書いたにちがひないわ。」 と思ふてつゞけてよんで行つた。

こんな手紙をKさんにかいて私は恥しい。 と云ふて私は今日の淋しみと苦しみとを避けられ樣か 私の苦しい身は私を一人でおいてくれない。 私は一人の事が恐ろしい。私はKさんを求めた。 私は自らを辱しめはなかつたか。私がKさんに融和を求める――、 それは私を裏切る事が私は弱いと思ふた。 悲しかつた。 私は自らの卑怯なふるまいを忘れてしまはふとさへした。

「あゝどうしたと云ふのでせう。 私とSさんと此の二十日間の 心持ち。 私はあなたにこふしたやさしい心持ちを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

聞かふとはしませんでした。胸が一ぱいになりました。——何とはなしに二人の間に壁が築かれてゐました。私には私の力でそれをどうすることも出來ませんでした。おゝみんな去つた。流れてしまつた。私はSさんのかなしみに指一本もふれられない樣な儚ないものになつた。Sさんの眼には塵埃の樣なものになつてしまつた。私は淋しい。その上にSさんに對してこんな淋しい心持ちなする樣になつた。淋しさに浸つて泣きつくすため——。言葉をかけて見たい——、と思ふたことが幾度だつたでせう。何かゝいてやりたい——、さ思ふたことが幾度てせう。けれどもこれは自らのみじめさを裏切樣に苦しかつたのです。私は私の缺點を今眞面目に見樣としてゐます。その缺點をSさんに看破されたものさ思ひました。私は私の缺點を缺點として裏切る樣な事は決してしまいさして固く自分の内にさぢこもつてゐました。友を失つて全く寂寥な影いでした。」Kさんの手紙を受けた私は安堵して氣がらつくりした。二度目の手紙があつた。「私はおど〳〵してゐます。逢いたいのですけれど行き得られるかどうかわかりません。久しくあゝしてゐたゝめか何か第一の言葉をかけるところまで進み得られるかどうかわかりません。」私はふるへた。もしKさんが見えなかつたら私等は永久に遠のいつてしまふのだろふさ思ふて目をつぶつてゐた。がたがたと戸の明いた時私は戰いた。おそろしいものに見つかつた時の樣にかたく小さくなる樣な氣がした。さりとめもないい〳〵の事が思ひ出されてとめどなく涙が流れた。泣いた二人はあつた。二人の語る聲はひそ〳〵としてゐた。同じ机に腰かけておだやかな心持ちになつて室を出た時はもう日がくれて冷めたい風が外にうなつてゐた。「私のかなしい日がなかつたら私等は仲よくなりやしますまいね」と私が云ふた時Kさんは「お互に意地をとほすかも知れないね。」二人は默つて歩いた。

…………………………

澄子の宿のおばあさんが病んでゐられる頃

「私一寸もおちついた日がなくてつまらない。」

と澄子はよく歎いた。そんな時光子は澄子の心持を幾分でも慰め度い思ふて

「私のとこへよつていらつしやいな。」

と進めて見た。

「私一寸よつて行かふ。」

なんて二人しておばあさんの病や見舞の人達の事を語つた。その頃から二人は又離れてゐた。そは〳〵した心持ちはとかれなかつた。おく齒に物のはさまつた樣な打らとけない。澄子の宿のおばあさんがなくなつた時も光子は

「おばあさんがおなくなりだつたつてお氣の毒ね。」

それ以外に澄子を慰めもしなかつた。光子が勤からかへつて來た時宿のおばさんが「澄子さんの宿のおばあざんがおなくなりなさいましたよ。」と話しかけるのも光子にはさけて自分の室に閉ぢこもつて自分の事を考へてゐた。二三日して宿のおばさんが「澄子さんはみもちなすつたつて。」と話かけられた時も「まあそふですか」とおばさんの話をさけてゐた。明日こそ仲よく話さふと思ふて行つても挨拶もしない。同じ室にゐるさへ不思議に思ふ程だつたつた。光子はやむを得ない用事があつても澄子のゐる時はきつとその室に入る事をさけてゐた。みんなで寫眞を取る時も光子は澄子とはなれて席についた。

「澄子さんも身おもになられてどんなに心配だろふ。」そんな事もきいて見たかつた。「私淋しくてたまらない。」勿論そんな事は云へなかつた。心持ちは口に表はせない。硝子越しに澄子の樣子を注意する程心配でゐながら光子はいつもさけた。離れてゐればたえられなくなつかしさを思ひながらも面をむき合せると妙に自分を守ろふとした。

「澄子さんはいゝんだ。あの方がお歸りになれば淋しかないもの、私は淋しい。友もない。戀人もない。凡べてに捨てられた。いつまでも／＼獨でゆかればならぬだろふ。たんと私は缺點をもつてゐる缺點だけかき集めてもつてゐるさ思へば心細くもなる。あゝ私は獨だ。」

こんなことを思ふて光子は自分のみじめさを力よわさとをつく／＼と泣いた。

「私は誰にもすがり度くない。私は私の意地を捨て度くない。たよりない生活をしてゐても。」と意地をはつても見た。

命を賭しての戀はきつと不眞面目ではない。燒け死ぬまでも。石になるまでと固くしめた心をみつめながら光子は遠い町のKの事を思い浮べてはよわくくづされて、

「かなしむための戀であつた。苦しむための戀であつた。このまゝに。私はどうなるだろふ。私は淋しい。私は此の戀以外に求めはしない。私は淋しい。私は苦しい。」

陽がくれて灯がついた。晝間からの事を思ひ續けて光子は今日の日繰も手もつけないで目をふさいでゐる。炬燵の上にトルストイの「父と子」がある。バザロフの面影を思ひ浮べながら「あんな淋しい死が――私にもせまつてゐるのだ。」光子は身ぶるいした。風はやんだらしい。靜かな晩になつた。

「いつ春がめぐつて來るだろふ？」

光子は灯をみつめて動かない。

「暖かい春の來る前には木枯の寒い冬がなければならない。」

と云ふた南國の友だちが急になつかしくなつた。ふつと

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

立つて光子は外に出た。

外氣は夜の寂寥にとぢこめられて灯一つ見えない。隅々におそろしい沈默の暗がたゞよつてゐる。村の淋しい生活はまだ八時と云ふに人の子一人通らない。どこかの風鈴がつきさゝる様にひゞく。赤子の泣き聲がして來る。

「やつぱり私にはKさんぎりだ。」

と光子は胸に手を合せた。「はがき四枚切手二枚下さい。」と云いながら友だちの事を思ふてゐた。痩せた蒼白いお上さんの顏が灯の下に一層淋しさを思はせた。ふつさ我にかへつた様に切手を受けとつて外に出た。「私等は同にでわざ〳〵心配を作つてゐる――、」と思ひながら家にとび込んだ、獨になればやつぱり淋しい。

「どふなるだろふ?。」

そんなことを思ひながら全く別の事がらを遠い友に久しぶりにかいた。

「澄子さん――、申譯けない。何と云はれてもやつぱり私は私の力で私の生活をかへては行けません。確實なあなたの生活を思ふ程私は私自身がかはいそうでならないのです。あなたの生活が幸福であつて私の不幸な生活がつゞく限り(私はあなたを忘れる事は出來ないけれど)やさしく仲よくする事は出來ないでせうよ。私はあなたと別れる事ばかり思ふてゐます。私のまけおしみの強い性質を御承知下さい。私は劣敗者として到底あなたの前に平氣で慰めを請ふ事は出來ないのてす。「光子さんは節制がないてはないか――。「寂しさに堪えられないから慰めてもらいたいのです。」それは光子さんの口實である。又一方には無理もないけれども侵されぬ一つの強み丈けは失つてもらい度くない。」當然私の受ける可き非難でした。私の尤も憎む可き行爲でした。私は感謝してゐます。今迄それをつとめて打ち消さふとしてゐました。考へまいとしてゐました。そんな事は自分にない――、と自分で辯解までしてゐました。それが私に苦しい事でした。私はあなたに感謝します。いつまでもあなたの事は私の親しい友として考へる事を許して下さい。到底私が眞からやさしくならぬ限り私を愛して下さる事は望めない事ですし。又望みもしません。こふした人間もあると思ふて忘れないで下さい。時には眞からなつかしいと思ふ事もある事許して下さい。私はきつと忘れないでせう。私の生活をよりよく知つて下さる、人はあなたきりですもの、此の間の私の淋しさはないのです。只私はそれを心中に思ふ丈けです。私は何かなければ自らどうしてもあなたの前に膝まづくことが出來ない人間です。私は何かの事件のある事をねがつてゐる程です。」

光子は澄子にあてたこの様な手紙をかきながら

「これを澄子さんに送られるかどうだろふ。」とさへ思ふて。筆をとめて光子はほてつた頬を押へた。そして

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「人の情を徒らにまち受ける人情の乞食。」

と繰返した。

「私はどふ云ふ人間だろふ。世の中の不必要な人間なのかも知れない。どうしたらいゝだらふ？」

「こうしていつまでもいつまでも淋しい道をたどらればならないのだろふか？」

「戀は苦しいものだそこに無限の尊ふさが含まれてゐるそれを得るためにはどんな苦しみもしればならない。」

「自分の苦しみをのがれる道を失ふて人につきあたる自分があはれでならない。然し私は勝手過ぎるけれども許してもらい度い。」

力なくペン先でつゝいてゐた紙に大きな穴があいた。いくら考へても仕方ない。

ランプがじりじりと石油を吸ひ上げてゐる。

——大四、三、一〇——

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

野枝

□先月は隨分つまらないものを出したので大分方々からおしかりを受けました。そのうめ合はせに今月は特別號にして少しよくしやうかと思ひましたけれど何しろちつとも準備が出來てゐませんから來月にしやうと思つてゐます。

□だん／＼いゝ時候になつて來ました。暫く一緒に集まろ機會がなくて過ぎました。近いうちに靜かな處で一度會を開きたいとおもつてゐますが集まつて頂けるでせうかお茶でも飲んでしんみりと皆でお話したいと思ひます。

□この頃は頼まれないからなどゝ原稿をお書き下さらない向きもあるさうですが、私は原稿と云ふものは人にたのまれたからといつて書けるものでもないし頼まれないからいゝものが書けないつてこともないものだと思つてゐますのでどなたにかぎらず自信のあるいゝものが頂けるのをだまつて待つてゐるのです。却つてお頼みして無理にいやなのをわざ／＼お書き下さるのも御迷惑と思はれますし私の方でもお願ひして書いて頂くからにはどうしてもつい出さればならぬと云ふやうにわるい情實をこしらへることになりますからほしくてたまらないのをだまつて下さるのを待つてゐるのですですから何卒そんな偏屈――でもないでせうが――な考へをおすてなすつてどん／＼おかき下さることをお願ひいたしておきます。

□平塚さんは今長篇御執筆中ですいよ／＼發表される日のはやく來るのを待ちます。

□かつちやんは寺島村の白ひげ様の横町にこんど越しましたと昨日通知が來ました。

□岩野清子氏はお家の皆様で修善寺へ行つてゐられます。

□私はそろ／＼補助團のパンフレットに出す材料を見つけにかゝらうと思つてゐます。未だに何の形式にも表はれないことは團員諸氏に對して申わけのないことだと思つてゐます。

□新刊書の紹介を怠つていつもすまないことには思つてゐますがついいゝかげんにしたくないと思ふものですから時間が見出せないでそのまゝになつてしまひます何卒あしからず思召し下さい。

□交換廣告をお斷はりすることはこの間も申ましたがもう一度こゝに念のため斷はつておきます。

□來月は前にも申ましたとほりに特別號を出したいと思つてゐますからこの十五日迄に原稿を澤山集めたいと思つてゐます。何卒よろしくおれがひいたします。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

□それからパンフレットのもずん／＼續けてはするつもりですが何分可なり時間がないのに貧弱な私の力で飜譯でもしやうといふのですからどうぞ少し位ひまの入ろこさはおゆるし下さい。そのかはり出來る丈けいゝものをさがすつもりで居ります。それに補助團のその出版費となるべき皆樣から出して頂いた金もずつと前々から雜誌の維持の方にうめあはせにまはされて殆んど出版の出來る程殘つてはゐませんのでその方からして何さかしなければならぬ有樣です。併しそんなことはあくまで責任をもつていたしつもりですから何卒御安心下さい。

□大分手傳ひをしてやらうと親切に仰云つて下さる方もありますが今の處しばらくは面倒なことばかりですから私一人でやらうと思ひます。もう少しどうにか形がついて混雜したりしないやうになればそうしてもつと忙しくなればお手傳ひを願ふかもしれませんがそれ迄は先づお斷はりいたし度いのです、何卒あしからず思召し下さい。

□雜誌が續かないのぢやないかなど御心配の方もあるやうですかこれはかりはどんなことがあつても續けます何卒私を信用なすつて下さい。先月あんなつまらないものを出したからなをあやぶまれたのかもしれませんが併し私は決してさうつまらなくはないと思ひますかなりいゝものがあの中にあつたことを信じます。たゞ私がなまけた事だけはどうも申譯けのないこさに思ひます。これからは決してあんなことのないやうにします。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昭和44年9月30日発行　【第6回配本】

青鞜第5巻　4月号

編著者	平塚らいてう
発行者	藤原正人
発行所	(株)明治文献
印刷	江明印刷
製本	(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
v.5
no.4

University of Colorado at [redacted]
[redacted] 6746513

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER